

# 山 岸 Ⅱ 遺 跡

— 熊川第一発電所引込変更工事に伴う発掘調査報告書 —

2013

東京電力株式会社 群馬支店  
群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



# 山 岸 Ⅱ 遺 跡

— 熊川第一発電所引込変更工事に伴う発掘調査報告書 —

2013

東京電力株式会社 群馬支店  
群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



## 例言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋字山岸に所在する山岸Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は熊川第一発電所引込変更工事に伴う事前調査として、原因者である東京電力株式会社群馬支店の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は原因者負担による。
4. 調査は発掘調査を平成24年7月30日から8月2日迄、整理調査及び報告書作成を平成24年8月3日から平成24年12月21日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。  
編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田 遺物実測・トレース：柿本・坂井・佐藤  
図版および写真図版作成：向出
7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。  
例) 坪井遺跡Ⅷ (遺跡名) (第8次)
8. 調査において以下の項目の一部を委託した。  
表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社  
測量：(株)測研
9. 本書における石器の石質は飯島静男氏(群馬地質研究会)、土師器・須恵器全般の編年観は中沢悟氏(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)に御教示いただいた。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音順敬称略)  
相京建史・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・石田 真・井上慎也・小野和之・小川卓也・  
神谷佳明・黒澤照弘・坂口 一・篠原正洋・鈴木徳雄・関 俊明・高橋政充・高林真人・堤 隆・  
中沢 悟・福田貫之・藤巻幸男・洞口正史・松本太郎・水田 稔・向出博之・諸田康成・山口逸弘・  
吉田智哉・(株)測研・(株)歴史の杜・群馬県教育委員会・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
11. 調査組織は次の通りである。  
教 育 長 黒岩文夫  
課 長 市村 敏  
社会教育GL 白石光男  
" 副GL 富田孝彦(調査担当)  
調査参加者 柿本六美・坂井春栄・佐藤久美子・向出治恵

# 凡例

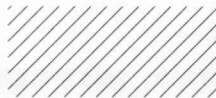
1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原・大前」(国土地理院1997)である。
2. 挿図の方位は磁北を示す。
3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

遺構：住居跡・・・1/60	カマド・貯蔵穴・土坑・・・1/30
遺物：復元土器・・・1/4	土器片・石器・石製品・・・1/3
鉄製品・・・1/2	
4. 遺構の略号については以下の通りである。 SI：竪穴式住居跡 SK：土坑
5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。( )内の数値は現存値、< >内の数値は復元値を表す。
6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面／内面の順で記した。
7. 挿図中のスクリーン・記号は以下の通りである。

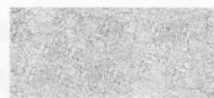
## 遺構・土層図



焼土



地山



白色粘土(山砂)

## 遺物



磨面  
摩耗



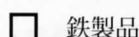
施釉



土器



石器



鉄製品

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

断面塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器を示している。

# 目次

例言

凡例

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 基本土層	10
第3章 検出された遺構と遺物	16
第1節 竪穴式住居跡	16
第2節 土坑	20
第3節 遺構外出土遺物	23
第4章 調査の成果と課題	24

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000) .....	4	第 10 図	SK01 実測図 (1/30) .....	21
第 2 図	基本土層 (S = 1/10) .....	10	第 11 図	SK02 実測図 (1/30) .....	21
第 3 図	調査区全体図 (S=1/60) .....	15	第 12 図	SK03 実測図 (1/30) .....	21
第 4 図	SI01 実測図 (1/60) .....	17	第 13 図	SK04 実測図 (1/30) .....	22
第 5 図	SI01 ビット実測図 (1/30) .....	17	第 14 図	土坑出土遺物実測図 .....	22
第 6 図	SI01 カマド実測図 (1/30) .....	18	第 15 図	遺構外出土遺物実測図 .....	23
第 7 図	SI01 貯蔵穴実測図 (1/30) .....	18	第 16 図	上ノ平 I 遺跡 11 号住居跡 (1/120) .....	25
第 8 図	SI01 遺物出土状況図 (1/60) .....	19	第 17 図	西吾妻地域における在地系甕集成 .....	25
第 9 図	SI01 出土遺物実測図 .....	19			

# 挿 表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡 .....	5	第 4 表	山岸 II 遺跡土坑計測値一覧 .....	25
第 2 表	SI01 柱穴計測表 .....	16	第 5 表	山岸 II 遺跡出土遺物観察表 .....	27
第 3 表	山岸 II 遺跡住居跡諸属性一覧 .....	25			

# 図 版 目 次

P L 1	1. 調査区近景 (北西から)		P L 5	1. 床下土坑 (南東から)	
	2. 調査区全景 (北西から)			2. 床下土坑半載状況 (南東から)	
P L 2	1. SI01 (南西から)			3. 遺物出土状況〈鉄釘〉(第 9 図 8)	
	2. SI01 (北西から)			4. 調査風景 (北西から)	
P L 3	1. 西側セクション (南東から)			5. 土坑群全景 (北から)	
	2. 東側セクション (南から)		P L 6	1. SK01・02・04 (南から)	
	3. 北側セクション (東から)			2. SK01 (西から)	
	4. カマド完掘状況 (北から)			3. SK01 土層堆積状況 (南から)	
	5. カマド断割状況 1 (北から)			4. SK02 (東から)	
	6. カマド断割状況 2 (北西から)			5. SK02 土層堆積状況 (西から)	
	7. カマド白色粘土検出状況 (北から)			6. SK03 (西から)	
	8. カマド火床面検出状況 (北西から)			7. SK03 半載状況 (西から)	
P L 4	1. カマド火床面断割状況 1 (北西から)			8. SK04 土層堆積状況 (西から)	
	2. カマド火床面断割状況 2 (南東から)		P L 7	SI01・SK01 ~ 04 出土遺物	
	3. 貯蔵穴完掘状況 (北西から)		P L 8	遺構外出土遺物	
	4. 貯蔵穴半載状況 (南東から)				
	5. 貯蔵穴遺物出土状況 (北西から)				
	6. P 1 半載状況 (西から)				
	7. P 2 半載状況 (西から)				
	8. P 5 半載状況 (東から)				



# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成24年7月上旬に東京電力株式会社群馬支店より、熊川第一発電所の引込変更に伴い送電線鉄塔の基礎補強工事の計画が策定され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野原町教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。照会地は周知の包蔵地「山岸Ⅱ遺跡（No.134）」の範囲内に含まれていることから確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第93条第1項の規定により、同年7月12日付けで関係書類（「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」）が提出された。同年7月19日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内に3本の試掘坑（トレンチ）を設定し、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、表土下80～90cm（畑面からは15～20cm）で平安時代の住居跡1軒、土抗1基が存在することが判明したので、施工前に発掘調査（記録保存）する必要があると判断し、その旨を開発事業主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。同日付け長教社第82号で長野原町教育委員会を經由して東京電力株式会社群馬支店長より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

## 第2節 調査の方法と経過

### （1）発掘調査

#### a. 表土除去

表土除去は重機（バックホー）を使用して行った。既存の鉄塔を残したままでの調査であったのでアングルにバケットが当たらないように、また確認調査で表土から80～90cmの深さで遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

#### b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。ただし、住居跡の壁が消失していることから調査区周辺が圃場整備等で本来の表土を失っていることが確認された。

#### c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡・陥し穴の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、土坑の場合は長軸に沿って半截して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/20のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

#### d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。ま

た、土層堆積状況図及び遺物出土状況（位置）図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラーライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

## (2) 調査経過

### a. 発掘調査

発掘調査は平成24年7月30日から8月2日にわたって実施された。

7月30日、表土剥ぎ。遺構精査で平安住居（SI01）1軒、土坑（SK01～03）3基検出。SI01・SK01ともにベルト設定後に掘り下げ。作業員を午後から3人入れる。

7月31日、SI01・SK01～03ベルトセクション写真撮影・作図。SI01カマド白色粘土範囲写真撮影・作図、カマド断ち割り開始。SK03から縄文前期末土器片出土。SK01・02東側に土坑1基（SK04）検出。一部調査区を拡張。

8月1日、SK01・02ベルト外し、清掃、完掘写真撮影・作図。SK03・04完掘写真撮影・作図。SI01ベルト外し、柱穴精査、掘り下げ（P1～P6）、遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ。カマド断ち割り平断面写真撮影・作図。貯蔵穴半截、セクション写真撮影・作図。

8月2日、SK01～04平断面図作成。SI01P1～P12完掘、カマド・貯蔵穴遺物出土状況写真撮影、遺物取り上げ。カマド断ち割り平断面写真撮影・作図・完掘。貯蔵穴完掘。全体清掃、全体写真撮影。補足図面作成。撤収。

### b. 整理調査・報告書作成

整理調査は平成24年8月3日～平成24年11月30日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで2箱、現場で作成した図面類は10枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄・注記作業は平成24年8月6・7日で実施した。

遺物の接合作業は最小限のものを同年8月8日～8月10日まで行い、補填材による復元作業は同年9月10日～9月19日までに実施した。

遺物の実測・トレースは同年8月17日～10月12日までの調査や事業の合間に実施した。併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集を平成24年10月1日～10月28日、併せて執筆作業は同年10月中旬～同年12月上旬にかけて行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして12月21日に全ての作業を完結した。

石器の石質鑑定は平成23年8月19日に飯島静男氏（群馬地質研究会）にお願いした。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置

山岸Ⅱ遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。山岸Ⅱ遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川の支流である熊川の右岸段丘上に立地する。

遺跡は吾妻流域地帯の最南端に位置し、東側には山頂から北西へ緩やかな稜線が伸びる菅峰（標高1,474m）が聳えている。この菅峰は別名「大洞山」といわれ、長野原町と東吾妻町との行政区の境界となっている。今からおよそ100万年前に活動していた古い火山で、もともと円錐形であったものが、長い年月の間、徐々にではあるが、絶え間なく山肌を刻んだ雨風よりその姿を変えてきているといわれている。

本遺跡の立地する段丘は熊川により開析された河岸段丘で、熊川からの比高差は約33mを測る（第1図）。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。この上に関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間-草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積している。調査地点の標高は733m位である。

### 第2節 周辺の遺跡

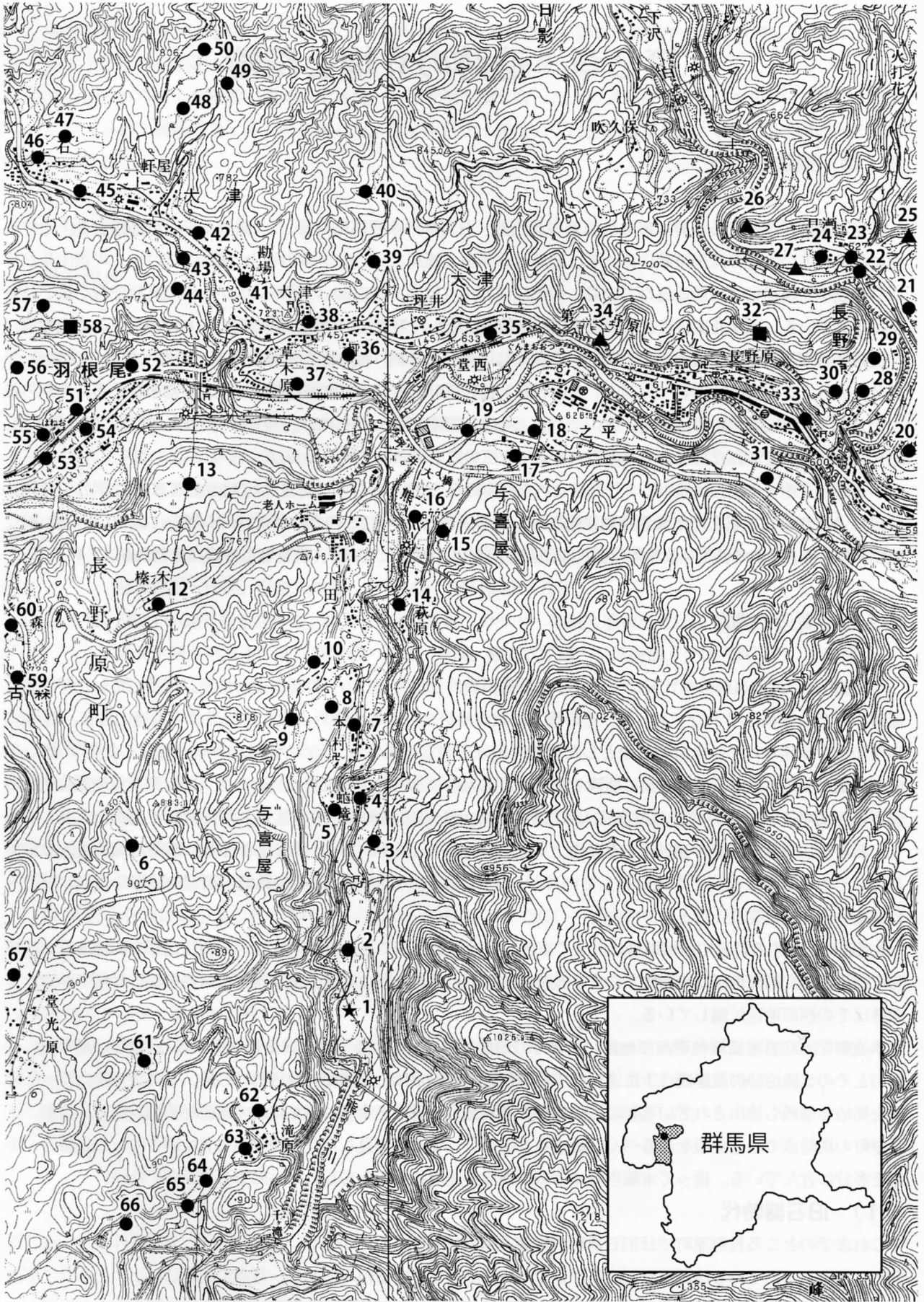
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した<sup>(1)</sup>。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成24年4月現在で220の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている<sup>(2)</sup>。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯は大きく東西に分けることができ、東部地区はダム湖及びダム関連事業と直結している地域、西部地区は東部寄りの大字長野原地区以外は基本的にはダム関連事業とは無関係の地域である。本遺跡はその西部地区に属している。

本遺跡を含む吾妻流域地帯西部地区には多くの遺跡が分布している（第1・2図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。

#### （1）旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡<sup>(3)</sup>で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間-草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。西吾妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡<sup>(4)</sup>でしか確認されていないのが現状である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡（数字は第1図と対応）

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	山岸II遺跡	134	集落跡	縄文・弥生・平安	本報告。	文献2
2	山岸I遺跡	133	散布地	平安	チャート片採集。	文献2
3	蛇籠II遺跡	132	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献2
4	蛇籠I遺跡	131	散布地	縄文		文献2
5	与喜屋II遺跡	140	散布地	縄文	中期。土器片採集。	文献2 『県遺跡地図』No.3121
6	所舟遺跡	142	散布地	不明		文献2
7	与喜屋I遺跡	139	散布地	縄文	石斧2片採集。	文献1,2
8	上ノ平遺跡	138	散布地	縄文・弥生・平安	縄文前期～後期。弥生中期土器・太形蛤刃石斧等採集。平成24年度調査(町)。	文献1,2,22 『県遺跡地図』No.3122
9	北沢II遺跡	137	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。黒曜石片・内黒土器採集。	文献2
10	北沢I遺跡	136	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。	文献2
11	外輪原I遺跡	135	散布地	縄文・弥生・平安	平成15・16年度調査(町)。縄文早期包含層検出。遺跡内に『上毛古墳総覧』記載の「五輪塚」があったが現在はほぼ消失。	文献1,2,13,15,22,30,31 『県遺跡地図』No.3120
12	榛木沢遺跡	125	散布地	縄文	前期。	文献2
13	外輪原II遺跡	141	散布地	縄文	磨石・敷石採集。	
14	萩原II遺跡	130	散布地	縄文・平安	縄文中期。	文献2
15	長畝III遺跡	128	散布地	平安		文献1,2
16	萩原I遺跡	129	散布地	平安		文献1,2,22
17	長畝II遺跡	127	集落跡	縄文	石斧採集。平成2・21年度調査(町)。前期住居跡2軒・中期後半住居跡2軒等検出。	文献2,4,20,28
18	長畝I遺跡	126	散布地	縄文	中期。平成15年度調査(町)。平安住居1軒、土坑4基検出。	文献2,13
19	旧新井村跡	143	村落跡	近世	昭和55年度調査(町)。天明泥流に埋没した村落。屋敷跡や用水池などを検出。南側台地上に墓地が残る。	文献2,27,36
20	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成17・22年度調査(町)、平成6～20年度調査(事)。縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安時代住居跡、中世掘立柱建物跡等多数検出。	文献2,16,20,39～44
21	東貝瀬III遺跡	66	散布地	縄文	チャート片採集。平成24年度調査(町)。	文献2
22	貝瀬I遺跡	67	散布地	縄文・平安	石斧採集。	文献2
23	貝瀬II遺跡	68	散布地	縄文		文献2
24	貝瀬III遺跡	69	散布地	縄文・平安		文献2
25	居家以岩陰群	80	その他	縄文・弥生	岩陰4カ所にわたる。	文献2
26	油郎岩陰群	81	その他	縄文・弥生	岩陰4カ所にわたる。	文献2
27	貝瀬岩陰群	82	その他	不明	岩陰2カ所にわたる。	文献2
28	嶋木I遺跡	72	集落跡、その他	平安・近世	平成16・22・24年度調査(町)。天明畑2枚・円形平坦面2基検出。	文献2,15,21
29	嶋木II遺跡	73	散布地	縄文・平安	黒曜石・磁器採集。	文献2
30	嶋木III遺跡	74	散布地	縄文	石錘・石鏃採集。	文献2
31	向原遺跡	75	集落跡	縄文・弥生・平安	平成5・19・20年度調査(町)。縄文後期住居5軒(敷石住居2軒)・縄文中期後半埋裏2基、弥生中期土坑7基、平安住居11軒・陥穴14基、時期不明土坑52基検出。	文献2,6,18,19,28
32	長野原城跡	85	城館跡	中世・近世	吾妻川左岸、町の市街地北側の尾根上に立地。土塁・堀切・物見台などが遺存している。長野原合戦の舞台。平成24年度調査(町)、平成23年度調査(事)。天明畑2枚検出。	文献1,2,22,23,26,45
33	町遺跡	219	その他	近世	平成23・24年度調査(事)。天明泥流に埋没した建物跡1棟・畑7枚のほか、畑下の土坑4基・小鍛冶跡等に関連した羽口や鉄サイ集中箇所1カ所を検出。	文献45
34	遠西岩陰群	83	その他	不明	岩陰2カ所にわたる。	文献2
35	小林家屋敷跡	211	屋敷跡	近世	平成13・14年度調査(町)。天明泥流に埋没した吾妻の分限者小林助右衛門の屋敷跡。石垣1基・土蔵跡1棟・礎石建物跡2棟を検出。	文献1,11,12,14,36,38
36	坪井遺跡	86	集落、墓その他	縄文・弥生・古墳・平安・中世	平成3・10・12・14・23年度調査(町)。縄文中期後半の拠点集落。縄文前期初頭住居跡・土坑、後期前葉土坑、弥生中期住居跡・土坑、平安住居・陥穴、中世配石・集石遺構などを検出。遺跡内に『上毛古墳総覧』記載の「鉄塚」あり。	文献1,2,4,8,10,12,34,35,37 『県遺跡地図』No.3123
37	草木原遺跡	87	散布地  その他	縄文・平安・近世	縄文中期。磨製石斧採集。平成17・20年度調査(町)。天明畑1枚・溝1条検出。	文献1,2,16,19,22
38	高平遺跡	88	散布地	縄文・平安		文献2
39	寺久保遺跡	89	散布地	縄文・弥生・平安	黒曜石片・弥生後期土器片採集。	文献2
40	寺沢遺跡	90	散布地	縄文	中期。	文献2
41	勘場木石器時代住居跡	91	集落跡	縄文	県指定史跡。昭和29年度調査(県)。中期後半の住居跡1軒を検出。前期～後期の遺物が多数出土。本町で最初の本格的な発掘調査である。住居跡出土土器は長野県の影響を強く受けており、本地域の当該期土器の様相をいち早く報告した意義は大きい。	文献1,2,22,24,25,28,33 『県遺跡地図』No.3125
42	熊野遺跡	92	散布地	縄文	中期。平成15年度調査(町)。	文献2,13
43	弁天遺跡	93	散布地	平安		文献2
44	鹿生遺跡	94	散布地	縄文	中期。石器片採集。	文献2
45	立石遺跡	95	散布地	縄文・平安	縄文中・後期。磨製石斧・石鏃・石匙・石錘採集。平成16年度調査(町)。縄文中期包含層検出。	文献1,2,15,22 『県遺跡地図』No.3125

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
46	クヌギⅠ遺跡	96	散布地	縄文・平安		文献2
47	クヌギⅡ遺跡	97	集落跡	縄文	昭和63年度調査(町)。中期中葉～後期。住居跡4軒(うち敷石住居3軒)、中期中葉の埋設土器など出土。	文献2,3,29
48	赤羽根遺跡	98	散布地	縄文・平安	縄文中期。石匙採集。	文献1,2
49	大久保Ⅰ遺跡	99	散布地	縄文	中期。	文献2
50	大久保Ⅱ遺跡	100	散布地	不明		文献2
51	羽根尾Ⅰ遺跡	112	散布地	平安		文献2
52	羽根尾宮原遺跡	113	散布地	平安	平成18年度調査(町)。	文献2,17 旧宮原遺跡
53	小滝Ⅰ遺跡	114	散布地	平安		文献2 旧小滝遺跡
54	羽根尾Ⅱ遺跡	115	散布地	奈良		文献2,
55	小滝Ⅱ遺跡	220	その他	近世	平成23年度調査(町)。天明畑4枚検出。	文献
56	宮の上遺跡	116	散布地	平安		文献2
57	暮坪遺跡	117	集落跡	縄文・平安	縄文中期土器・磨製石斧・凹石採集。平成12年度調査(町)。縄文前期前葉(二ツ木式期)住居跡2軒・土坑2基などを検出。	文献2,9,10
58	羽根尾城跡	123	城館跡	中世	町指定史跡。吾妻川左岸、城峯山の山頂に立地。梯郭式の山城で土塁・堀切が遺存している。羽根尾(海野)氏の拠城。	文献1,2,22,23,26
59	田之平遺跡	119	散布地	縄文	中期。	文献2
60	諏訪原遺跡	121	散布地	縄文	チャート片・石皿採集。	文献2
61	チガヤ遺跡	146	散布地	縄文・平安	磨石採集。	文献2
62	滝原Ⅰ遺跡	150	散布地	平安		文献2
63	滝原Ⅱ遺跡	151	散布地	平安		文献2
64	滝原Ⅲ遺跡	152	集落跡	縄文・平安	黒曜石片・磁器採集。平成8年度調査(町)。縄文後期初頭敷石住居跡1軒・土坑2基を検出。	文献2,7
65	滝原Ⅳ遺跡	153	散布地	平安		文献2,
66	滝原Ⅴ遺跡	154	散布地	平安		文献2
67	堂光原遺跡	184	散布地	縄文	黒曜石片採集。	文献2

## (2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

### ①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰<sup>(5)</sup>がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・撚糸文・押型文が認められる。横壁勝沼遺跡<sup>(6)</sup>では草創期の槍形尖頭器が表採されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡<sup>(7)</sup>、立馬Ⅰ遺跡<sup>(8)</sup>、立馬Ⅲ遺跡<sup>(9)</sup>で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半撚糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では撚糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連綿と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、三平Ⅰ遺跡<sup>(10)</sup>、三平Ⅱ遺跡<sup>(11)</sup>、花畑遺跡<sup>(12)</sup>、幸神遺跡<sup>(13)</sup>、横壁中村遺跡<sup>(14)</sup>、長野原一本松遺跡<sup>(20)</sup>、西部地区では坪井遺跡<sup>(36)</sup>で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半撚糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や溪沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

### ②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡<sup>(36)</sup>で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共伴が確認された。暮坪遺跡<sup>(7)</sup>では前期前葉(二ツ木式期)の住居跡、長畝Ⅱ遺跡<sup>(17)</sup>では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)

の住居跡・土坑が検出されている。東部地区では上原Ⅰ遺跡<sup>(15)</sup>で前期初頭の住居跡が9軒、楡木Ⅱ遺跡で前期前葉（黒浜式期）の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は楡木Ⅱ遺跡、三平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡<sup>(16)</sup>で前期後葉（諸磯式期）の住居跡が、川原湯勝沼遺跡<sup>(17)</sup>で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

### ③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘の遺跡で発見されはじめている。中期初頭（五領ヶ台式期）の遺跡は楡木Ⅱ遺跡で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3基・土坑21基、上原Ⅳ遺跡で土坑1基が確認されている<sup>(18)</sup>。中期前葉（阿玉台式期）の遺跡は立馬Ⅱ遺跡<sup>(19)</sup>で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原Ⅰ遺跡<sup>(20)</sup>で住居跡が1軒、幸神遺跡<sup>(21)</sup>で土坑が検出されている。横壁中村遺跡<sup>(22)</sup>では中期中葉（勝坂式期）の住居跡、西久保Ⅰ遺跡<sup>(23)</sup>では同時期の土坑が確認されている。中期中葉（焼町類型期）の遺跡は幸神遺跡で焼町土器の深鉢を炉体土器とした住居跡、林中原Ⅱ遺跡<sup>(24)</sup>と横壁中村遺跡では焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平Ⅰ遺跡<sup>(25)</sup>では同時期の住居跡が12軒検出された。西部地区ではクヌギⅡ遺跡<sup>(47)</sup>で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、本遺跡で少量の破片が認められたことは注目に値する。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡<sup>(20)</sup>、横壁中村遺跡<sup>(26)</sup>を筆頭として近年の調査により石川原遺跡<sup>(27)</sup>、林中原Ⅰ遺跡、林中原Ⅱ遺跡が新たに加わり<sup>(28)</sup>、西部地区では坪井遺跡<sup>(36)</sup>に代表される。遺跡を大規模に調査している前5者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半（～加曾利B式期）まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒（拡張住居含む）、土坑49基が検出されている<sup>(9)</sup>。土器は大きく4系統（①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③「郷土」式土器<①と②の融合型式>、④析倉Ⅱ式土器<越後系>）が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている。この坪井遺跡出土土器の傾向は前4者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」（41）出土土器にも看取される。その他、向原遺跡<sup>(31)</sup>では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では尾坂遺跡<sup>(29)</sup>で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居と確認され、敷石住居の出現期の事例といえよう。

### ④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半まで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギⅡ遺跡<sup>(47)</sup>、向原遺跡<sup>(31)</sup>、滝原Ⅲ遺跡<sup>(64)</sup>、古屋敷遺跡<sup>(30)</sup>、東部地区では上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡、林中原Ⅰ遺跡<sup>(31)</sup>に代表される。後期初頭（称名寺式期）～後期中葉（加曾利B式期）までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡<sup>(20)</sup>、横壁中村遺跡で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ大形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原Ⅰ遺跡、上原Ⅳ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡でも後期初頭～前葉（称名寺式期～堀之内式期）の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉（高井東式期）の住居跡は横壁中村遺跡で3軒検出されているのみである。後期末（安行Ⅰ・Ⅱ式期）に関しては横壁中村遺跡や立馬Ⅰ遺跡で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

## ⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑Ⅰ岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡で晩期末葉（千網式併行）の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半（特に末葉～弥生中期）に関しては最近の調査で増えつつある。立馬Ⅰ遺跡では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡では晩期末葉の住居跡2軒、埋甕1基、上原Ⅳ遺跡では土坑1基が検出されている。立馬Ⅰ遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯勝沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壺棺再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「氷式突帯壺」<sup>(32)</sup>の上半部が逆に、もう一方は浮線文系の半精製甕が正位の状態出土している。この壺棺再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡<sup>(33)</sup>で氷式土器の浅鉢、向原遺跡(31)で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。

### (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では長野原一本松遺跡(20)では中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡では埋甕（再葬墓か）1基が検出され、東海地方に分布する檜王式土器の甕が出土している。下原遺跡<sup>(34)</sup>では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡<sup>(35)</sup>では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑墓（再葬墓か）、尾坂遺跡でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡<sup>(36)</sup>では前期末の短頸壺を納めた土坑、三平Ⅰ遺跡では前期末～中期前半の土坑が数基検出されている。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡(36)でも中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が6基、向原遺跡(31)では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基確認されている。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡(11)、上ノ平遺跡(8)で中期前半までの資料が比較的まとまっている。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡で住居跡2軒と土器棺墓2基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畑遺跡<sup>(37)</sup>で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群(25)、寺久保遺跡(39)、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡では遺構外で、二社平遺跡<sup>(38)</sup>周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

### (4) 古墳時代

これまで遺構外では他時代の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡(36)、長野原一本松遺跡(20)、二社平遺跡などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡<sup>(39)</sup>で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡でも同時期の住居跡1軒の他、土師器(片)がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡<sup>(40)</sup>でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にはほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡<sup>(41)</sup>で前期と考えられる住居跡から台付甕や埴形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時代の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』によれば、大津地区の「鉄塚」(36)、与喜屋地区の「五輪塚」(11)が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形



状を保ち、現在は墓地として利用されている。その他、「てつか（てづか）」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

## （5）奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡（54）のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、本遺跡のほか坪井遺跡（36）、向原遺跡（31）、長畝Ⅰ遺跡（18）、東部地区では立馬Ⅰ遺跡、東原Ⅰ遺跡<sup>(42)</sup>、楡木Ⅰ遺跡<sup>(43)</sup>、楡木Ⅱ遺跡<sup>(44)</sup>、花畑遺跡<sup>(45)</sup>、下原遺跡、中棚Ⅰ遺跡<sup>(46)</sup>、上原Ⅰ遺跡<sup>(47)</sup>、上原Ⅲ遺跡<sup>(48)</sup>、上原Ⅳ遺跡<sup>(49)</sup>、林宮原遺跡<sup>(50)</sup>、上ノ平Ⅰ遺跡、三平Ⅰ遺跡、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡（20）、尾坂遺跡などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」・「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞観永寶」が出土しており注目される。この他、未報告ではあるが、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書が大量に出土しておりその性格が注目される。

## （6）中世

吾妻流域地帯には中世城館跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡（58）、長野原城跡（32）、丸岩城跡<sup>(51)</sup>、柳沢城跡<sup>(52)</sup>、金花山砦跡<sup>(53)</sup>などがあり、その他に林城跡<sup>(54)</sup>、林の烽火台<sup>(55)</sup>などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石臼などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳壺・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金花山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになってきている。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、二反沢遺跡<sup>(56)</sup>、下原遺跡、林宮原遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅰ遺跡、長野原一本松遺跡（20）、尾坂遺跡となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

## （7）近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした

た。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石(As-D)、4世紀の浅間C軽石(As-C)、天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)、天明3(1783)年の浅間A軽石(As-A)という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3(1783)年の噴火は軽石降下後に襲った泥流(鎌原火砕流)により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらし、有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬬恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが<sup>(57)</sup>、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡(19)の痕跡が確認された。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限者小林助右衛門屋敷の一部が発見され(35)、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった<sup>(58)</sup>。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木I遺跡(28)、東貝瀬Ⅲ遺跡(21)、町遺跡(33)、下田遺跡<sup>(59)</sup>、下原遺跡<sup>(60)</sup>、中棚Ⅱ遺跡<sup>(61)</sup>、西宮遺跡<sup>(62)</sup>、東宮遺跡<sup>(63)</sup>、石川原遺跡、西ノ上遺跡<sup>(64)</sup>、川原湯勝沼遺跡、横壁勝沼遺跡、横壁中村遺跡、西久保Ⅳ遺跡<sup>(65)</sup>、尾坂遺跡<sup>(66)</sup>、久々戸遺跡<sup>(67)</sup>などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大きいと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。上原Ⅳ遺跡、二反沢遺跡、幸神遺跡、長野原一本松遺跡(20)が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝(旧河川流路)を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

### 第3節 基本土層

本遺跡の基本層序は第3図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下ようになる。

#### 第Ⅰ層 暗灰褐色土

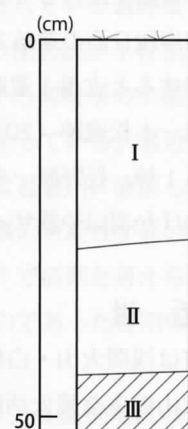
いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。拳大の礫を多く含む。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

#### 第Ⅱ層 明褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

#### 第Ⅲ層 明黄褐色砂質土

いわゆる関東ローム層に該当する層で、全体的に粘性は弱く、締まりはやや強い。砂質土である。



第2図 基本土層 (S = 1/10)

## 註

1. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中段段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版 (<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>) で参照願いたい。本書では第1表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野原町教育委員会 2000～2011『町内遺跡Ⅰ～Ⅺ』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 中隆之 1979『石畑遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局  
笠懸野岩宿文化資料館 2000『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』  
原田昌幸 2007『日本の美術 No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
6. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
7. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『楡木Ⅱ遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
8. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
9. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
10. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
11. 註10と同じ。
12. 註6と同じ。
13. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
14. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012『横壁中村遺跡(12)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
15. 平成24年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した際、前期初頭花積下層式期に併行する住居跡が検出された。詳細は整理作業の進捗に委ねたい。
16. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』
17. 註6と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005『川原湯勝沼遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
18. 上原Ⅱ遺跡は平成23年度、上原Ⅳ遺跡は平成24年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した。
19. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
20. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『年報27』
21. 註13と同じ。
22. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005『横壁中村遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
23. 註6と同じ。
24. 未報告。長野原町教育委員会 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
25. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

告書第23集

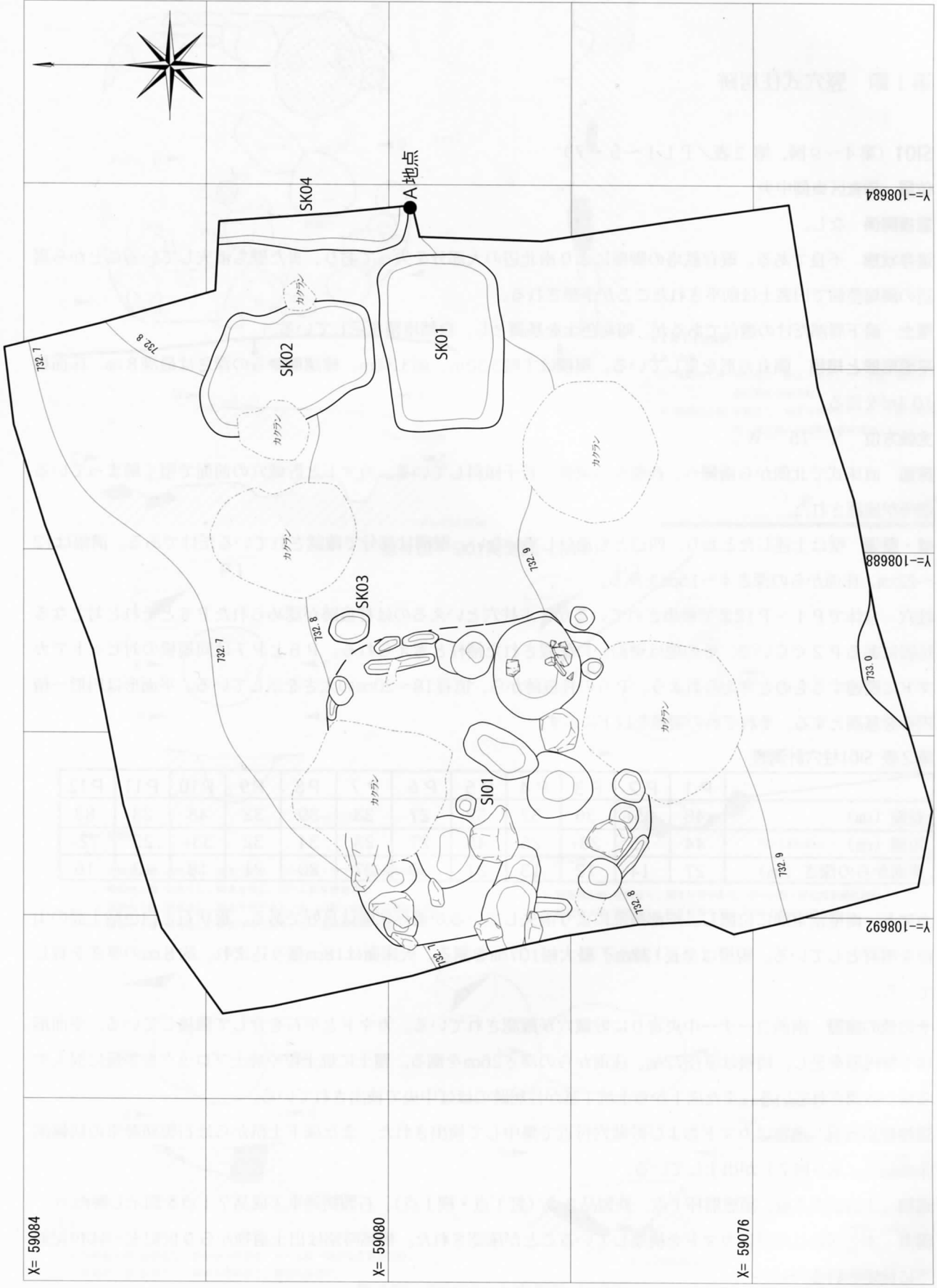
26. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005～2012『横壁中村遺跡(2)～(12)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5・7・10・20・22・29・30・34・37集
27. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報28』
28. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008～2010『年報27～29』
29. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『年報30』
30. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
31. 長野原町教育委員会 2010『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
32. 中沢道彦 1998「氷Ⅰ式」の細分と構造に関する試論『長野県小諸市氷遺跡発掘調査資料図譜』第三冊 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
33. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004『久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
34. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『下原遺跡Ⅱ』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
35. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による平成21年度の調査で検出された。また同じ時期に長野原町教育委員会でも隣接地を調査した際、弥生時代中期前半を中心とした竪穴状遺構1基のほか数基の土坑が検出された。  
長野原町教育委員会 2011『町内遺跡X』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
36. 註15と同じ。短頸壺は胴上半に変形工字文、胴下半～底面にはヘラ描横線が施されている。また付近には同時期の高坏片も出土している。
37. 註6と同じ。
38. 註6と同じ。
39. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
40. 註18と同じ。そのうち1軒は豊富な遺物の出土が見られ、同時期のセット関係の把握ができそうである。
41. 註35と同じ。
42. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010『東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集
43. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010『年報29』
44. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『楡木Ⅱ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
45. 註6と同じ。
46. 平成23年度に町営土地改良事業に伴い発掘調査を実施した。
47. 註18と同じ。
48. 註46と同じ。
49. 註15と同じ。
50. 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集  
長野原町教育委員会 2012『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
51. 文献1・2・22・23・26。
52. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集  
その他参考文献は、文献1・2・22・23・26・28。
53. 文献2。
54. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009・10『年報28・29』  
平成25年度に町営土地改良事業に伴う発掘調査を予定している。これまでの概要は以下に詳しい。  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『遺跡は今』第16号

55. 文献26。
56. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006『上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
57. 嬭恋村教育委員会 1981『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』  
嬭恋村教育委員会 1994『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報 (よみがえる延命寺)』
58. 未報告。これら長野原市街地の被災の状況から後述する町遺跡(33)と同一遺跡になると考えられる。水特法関連事業に関しては別稿により報告する予定である。なお、「青面金剛塔」は雲林寺参道に安置してある。
59. 註6・36と同じ。
60. 註33と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
61. 註60と同じ。
62. 未報告。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『年報28』
63. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011・12『東宮遺跡(1)・(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34・38集
64. 註33と同じ。
65. 未報告。文献17。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001・10『年報20・29』
66. 註6と同じ。群馬県・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007~2011『年報26~30』
67. 註60と同じ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『長野原久々戸遺跡』県道長野原草津口停車場線道路(橋梁)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**参考文献** (第1表の文献番号に対応)

1. 長野原町 1976『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1990『クヌギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
4. 長野原町教育委員会 1992『長畝Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
5. 長野原町教育委員会 1995『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
6. 長野原町教育委員会 1996『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
7. 長野原町教育委員会 1998『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
8. 長野原町教育委員会 2000『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集
9. 長野原町教育委員会 2001『暮坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
10. 長野原町教育委員会 2002『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
11. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
12. 長野原町教育委員会 2003『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
13. 長野原町教育委員会 2004『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
14. 長野原町教育委員会 2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
15. 長野原町教育委員会 2005『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
16. 長野原町教育委員会 2006『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
17. 長野原町教育委員会 2007『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
18. 長野原町教育委員会 2009『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集

19. 長野原町教育委員会 2010『町内遺跡Ⅸ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
20. 長野原町教育委員会 2011『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
21. 長野原町教育委員会 2012『町内遺跡Ⅺ』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
22. 小池富治郎編 1936『吾妻郡誌』吾妻教育学会
23. 山崎一・山口武夫 1972『吾妻郡城壘史』
24. 塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県指定史跡）勘場木遺跡』
25. 群馬県 1988『群馬県史』資料編1
26. 群馬県教育委員会 1988『群馬県の中世城館跡』
27. 群馬県立歴史博物館 1995『第52回特別展 天明の浅間焼け』
28. 上毛新聞社 1999『群馬県遺跡大辞典』
29. 笠懸野岩宿文化資料館 1999『第25回企画展 群馬の注口土器展』
30. 白石光男・山口逸弘 1999「外輪原Ⅰ遺跡出土の土器」『群馬県考古学手帳』9
31. 富田孝彦 2000「外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器」『群馬県考古学手帳』10
32. 群馬県教育委員会 2001『群馬の史跡（原始古代編）』
33. 群馬大学教育学部編 2004『尾崎喜左雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録』雄山閣
34. 笠懸野岩宿文化資料館 2004『第39回企画展 底の尖った土器』
35. 群馬県立博物館 2004『第77回企画展 新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けると・・・』
36. かみつけの里博物館 2007『第16回特別展 江戸時代、浅間山大噴火』
37. 関根慎二 2008「浅間山を廻る縄文土器」『研究紀要26』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
38. 黒澤照弘・大西雅広2009「茨城県、栃木県、群馬県内の江戸後期における生産と流通」『第19回九州陶磁器学会 江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）』
39. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002『長野原一本松遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
40. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007『長野原一本松遺跡（2）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
41. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『長野原一本松遺跡（3）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
42. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『長野原一本松遺跡（4）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
43. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009『長野原一本松遺跡（5）』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
44. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995～2011『年報14～30』
45. （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『年報31』



第3図 調査区全体図 (S=1/60)



# 第3章 検出された遺構と遺物

## 第1節 竪穴式住居跡

SI01 (第4~9図、第2表/PL1~5・7)

位置 調査区東側中央

重複関係 なし。

遺存状態 不良である。既存鉄塔の脚部により南北辺の大部分を失っており、また壁も消失していることから周辺の圃場整備で旧表土は削平されたことが予想される。

覆土 最下層部だけの遺存であるが、暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形態と規模 隅丸方形を呈している。規模は主軸3.30m、副3.34m、確認面からの深さは最深8cm、床面積10.4㎡を測る。

主軸方位 N-15°-W。

床面 直床式で北側から南側へ、西側から東側へ若干傾斜している。カマドと貯蔵穴の前面で堅く締まっている箇所が確認された。

壁・壁溝 壁は上述したとおり、四辺とも遺存していない。壁溝は部分で確認されているだけである。溝幅は12~22cm、床面からの深さ4~15cmを測る。

柱穴 全体でP1~P12まで検出されているが、支柱穴といえるのは柱痕跡が認められたP5とそれと対となる位置にあるP2ぐらいで、その他は壁沿いに配置された補柱と考えられる。P6とP7は同規模の対ピットでカマドに関連するものと考えられよう。P5の柱痕跡から、直径18~20cmの太さを示している。平面形は円形~楕円形を基調とする。それぞれの規模を以下に示す。

第2表 SI01柱穴計測表

	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
長軸 (cm)	48	85+	36	32	52	27	23	39	32	48	23	82
短軸 (cm)	44	55	28+	25	45	27	23	34	32	33+	23	72+
床面からの深さ (cm)	27	14	12	13	21	30	27	20	21	18	13	16

カマド 南壁南東隅に位置し、一部攪乱により消失しているが遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を用材としている。規模は全長132cm、最大幅107cmを測る。火床面は18cm掘り込まれ、約8cmの厚さを有している。

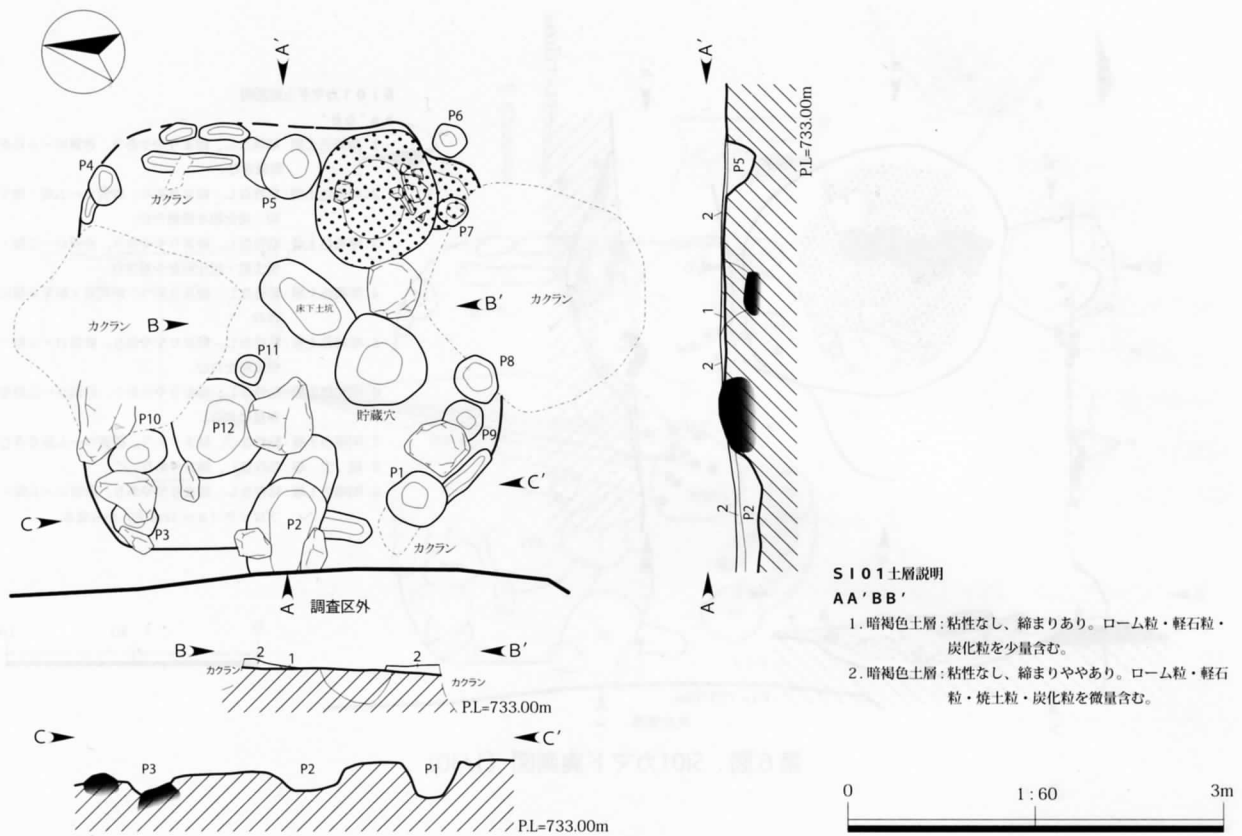
その他の施設 南西コーナー中央寄りに貯蔵穴が確認されている。カマドと平石を介して隣接している。平面形は不整形円形を呈し、規模は直径72cm、床面からの深さ26cmを測る。覆土に焼土粒や焼土ブロックを多量に混入する層が確認されている。また床下から土坑1基が住居跡のほぼ中央で検出されている。

遺物検出状況 遺物はカマドおよび貯蔵穴付近で集中して検出された。また床下土抗からは石製紡錘車の紡輪部未成品? (第9図7) が出土している。

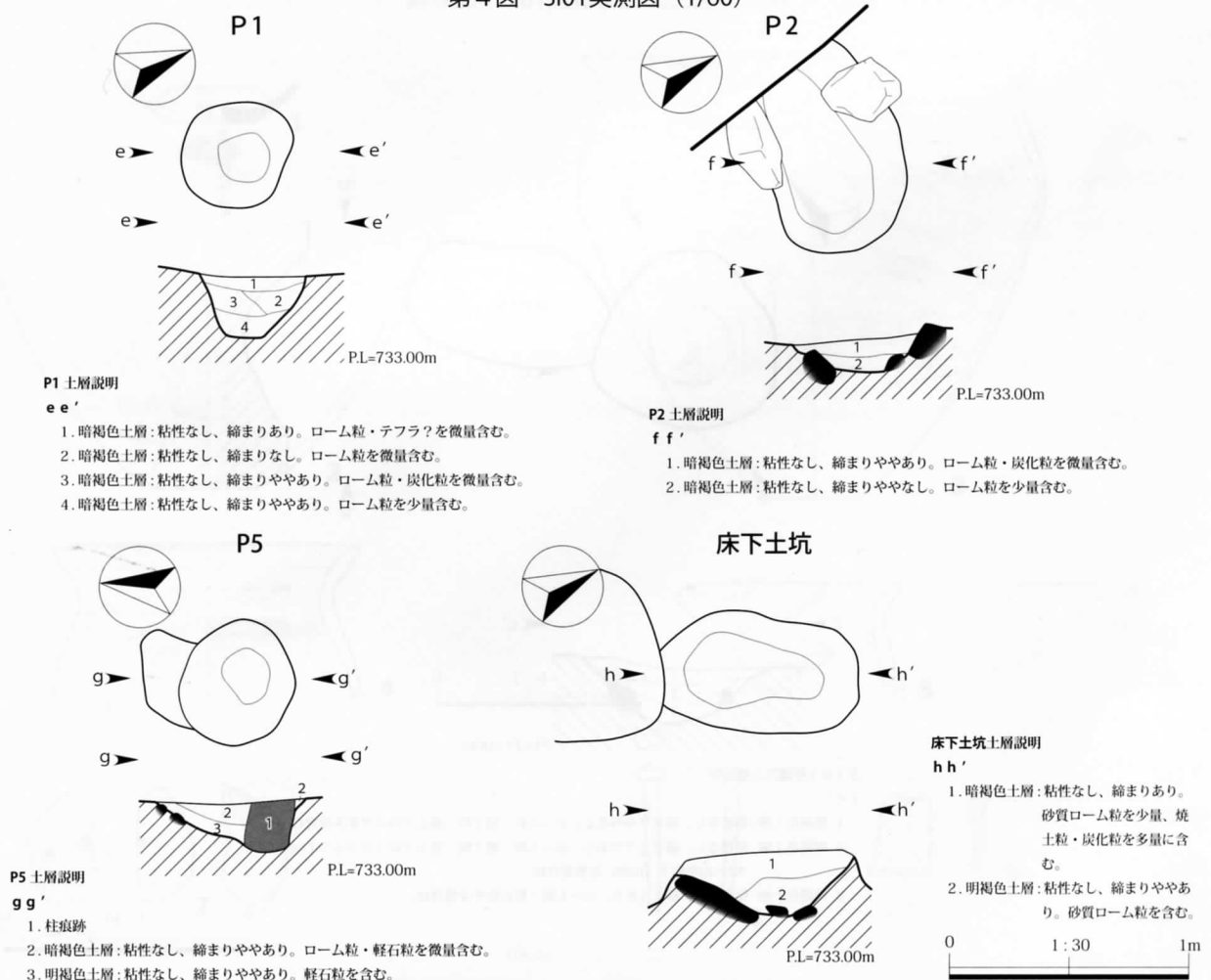
遺物 土師器甕5点、須恵器杯1点、鉄製品2点 (釘1点・楔1点)、石製紡錘車未成品? 1点を図示し得た。

備考 本住居跡は南壁にカマドを構築していることが確認された。構築時期は出土遺物から9世紀末~10世紀前半に比定される。

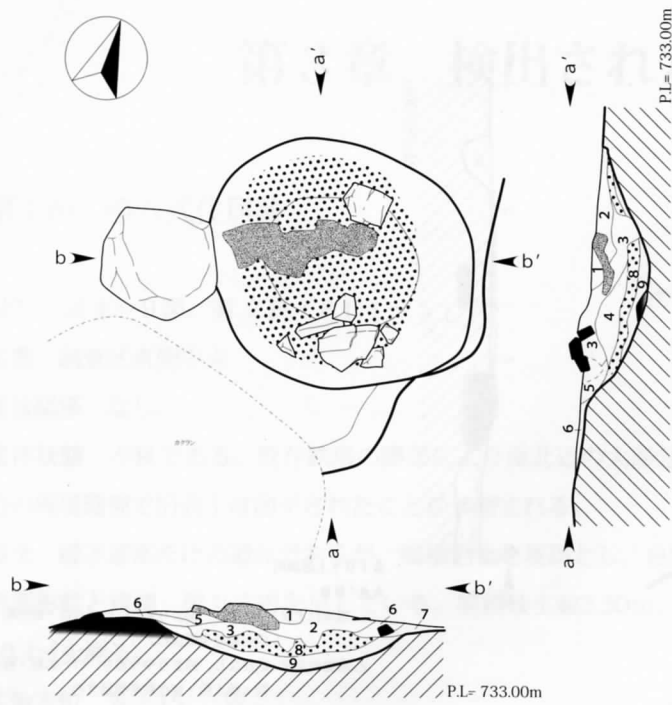




第4図 SI01実測図 (1/60)



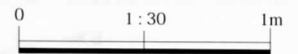
第5図 SI01ピット実測図 (1/30)



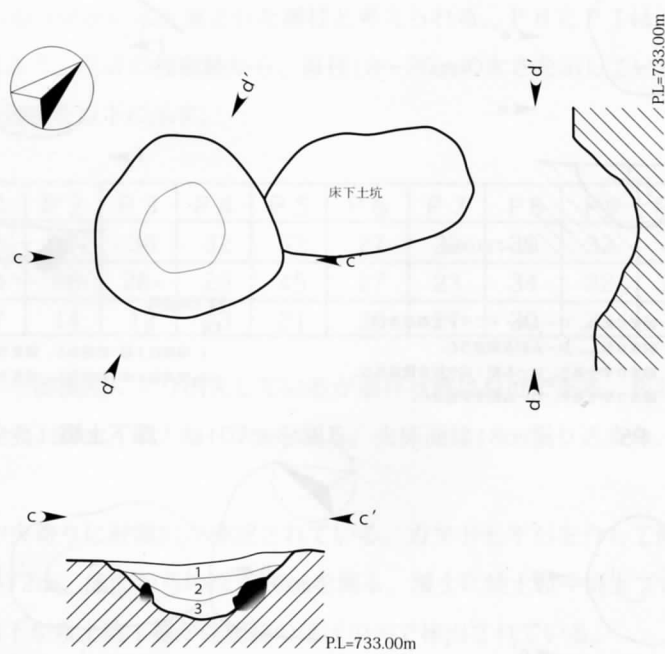
**SI01カマド土層説明**

**a a' b b'**

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を微量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。砂質ローム粒・焼土粒・炭化粒を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒・焼土粒・炭化粒を少量含む。
4. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり。砂質焼土粒を多量に含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒・焼土粒を含む。
6. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を多量に含む。
7. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり。砂質ローム粒を含む。
8. 焼土層：粘性なし、締まりあり。
9. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒・ブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 大）から成る。



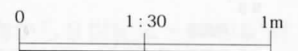
第6図 SI01カマド実測図 (1/30)



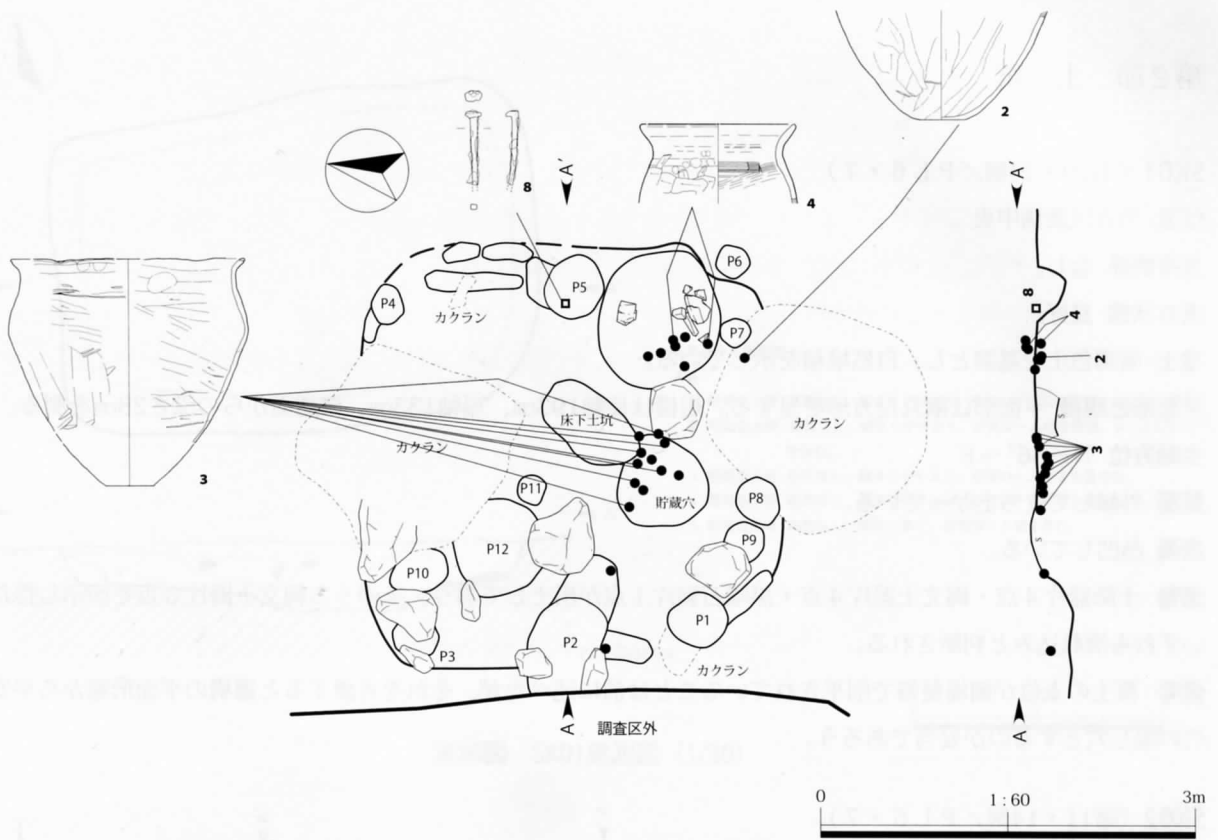
**SI01貯蔵穴土層説明**

**c c' d d'**

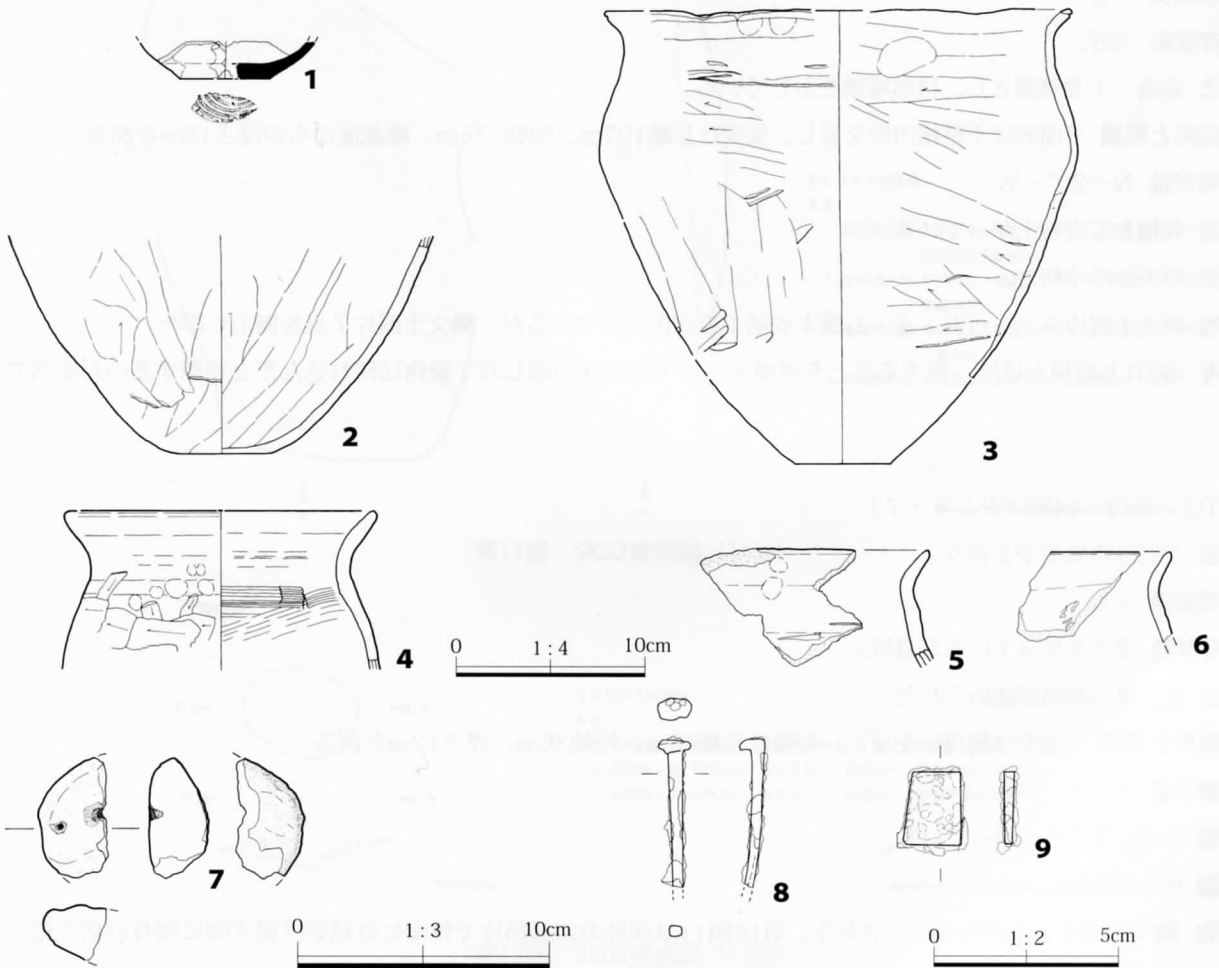
1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・焼土粒・焼土ブロックを少量含む
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・焼土粒・焼土ブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 大）・白色粒土（山砂）を多量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を少量含む。



第7図 SI01貯蔵穴実測図 (1/30)



第8図 SI01遺物出土状況図 (1/60)



第9図 SI01出土遺物実測図

## 第2節 土 坑

### SK01 (第10・14図／P L 6・7)

位置 調査区東側中央

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸193cm、短軸133cm、確認面からの深さ28cmを測る。

主軸方位 N-86°-E

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹している。

遺物 土師器片4点・縄文土器片4点・黒曜石剥片1点が出土しており、そのうち縄文土器片3点を図示し得たがいずれも流れ込みと判断される。

備考 覆土の上位が圃場整備で削平されていることは前に述べたが、それを考慮すると遺構の平面形態から平安時代の陥し穴とするのが妥当であろう。

### SK02 (第11・14図／P L 6・7)

位置 調査区東側中央

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸197cm、短軸136cm、確認面からの深さ18cmを測る。

主軸方位 N-20°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 中央かやや凹む。

遺物 縄文土器片9点・台石1点・石鏃未成品1点が出土しているが、縄文土器片7点を図示し得た。

備考 SK01と規模がほぼ一致することを考慮すると平安時代の陥し穴で遺物は流れ込んだと判断するのが妥当であろう。

### SK03 (第12・14図／P L 6・7)

位置 調査区中央やや北寄り

重複関係 なし

遺存状態 攪乱を被っているが良好。

覆土 焼土層の堆積が認められた。

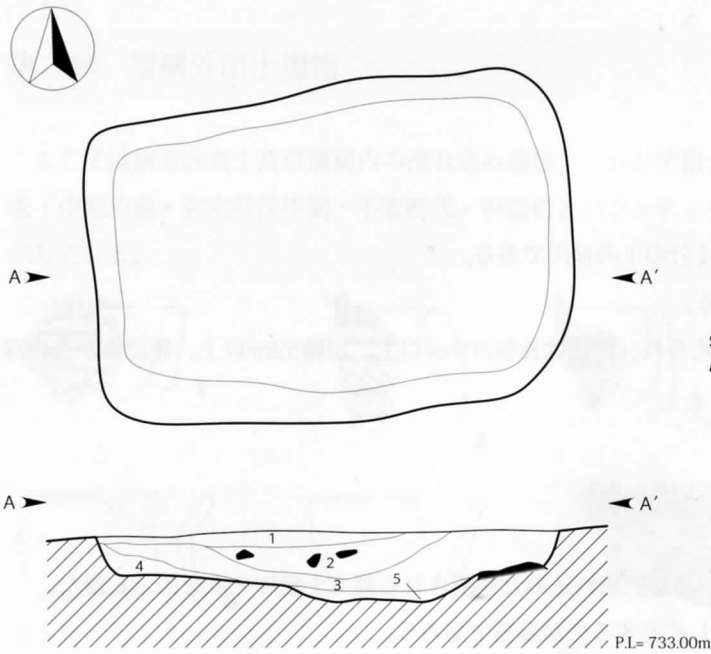
平面形と規模 平面形は楕円形を呈し、規模は長軸46cm、短軸36cm、深さ12cmを測る。

主軸方位 N-7°-W

壁面 外傾して立ち上がっている。

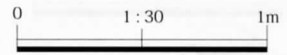
底面 中央が凹む。

遺物 縄文土器片1点のみの出土である。第16図11は深鉢の口縁部片で外面には結節浮線文間に細身の粘土紐を貼付したRL縄文帯を配し、内面にも結節浮線文を2段施している。遺物の特徴から縄文時代前期末の所産と考え

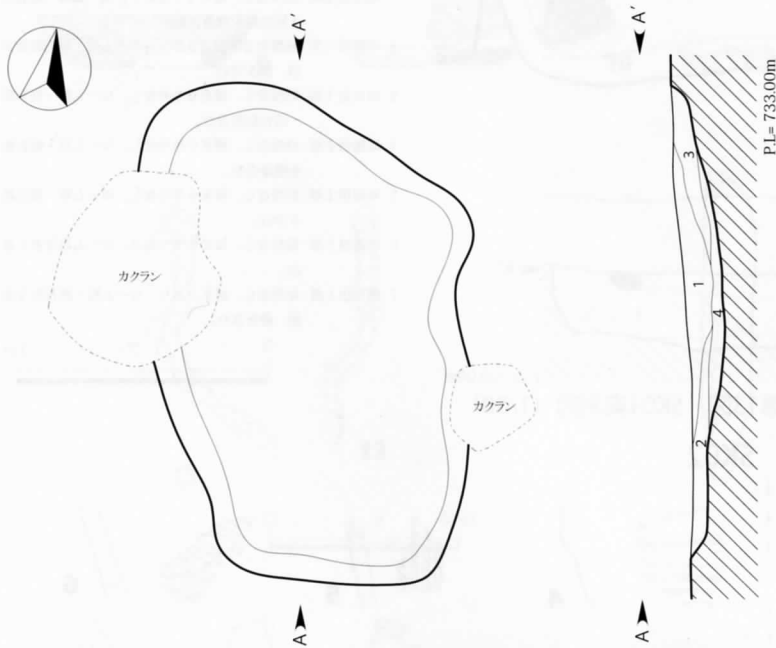


**SK01土層説明**  
AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を微量、炭化粒を少量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を微量、φ~5cm大の礫を含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を少量含む。
4. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。砂質ローム粒を少量含む。
5. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。砂質ローム粒を含む。

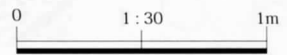


第10図 SK01実測図 (1/30)

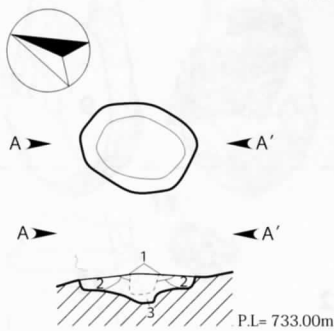


**SK02土層説明**  
AA'

1. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒・炭化粒を少量含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。砂質ローム粒を少量含む。
3. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりややなし。砂質ローム粒を少量含む。
4. 明褐色土層: 粘性なし、締まりあり。砂質ローム粒を含む。

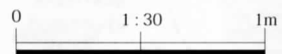


第11図 SK02実測図 (1/30)



**SK03土層説明**  
AA'

1. 赤褐色土層: 粘性なし、締まりややあり。焼土粒を多量に含む。
2. 暗褐色土層: 粘性なし、締まりなし。砂質ローム粒を含む。
3. 明褐色土層: 粘性なし、締まりなし。砂質ローム粒を多量に含む。



第12図 SK03実測図 (1/30)

られる。

**SK04** (第13・14図/PL6・7)

**位置** 調査区東側中央隅

**重複関係** なし。

**遺存状態** 良好。調査区際で検出され、全体の約4分の1の検出である。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は隅丸長方形を呈すると考えられ、規模は長軸207cm以上、短軸52cm以上、確認面からの深さ31cmを測る。

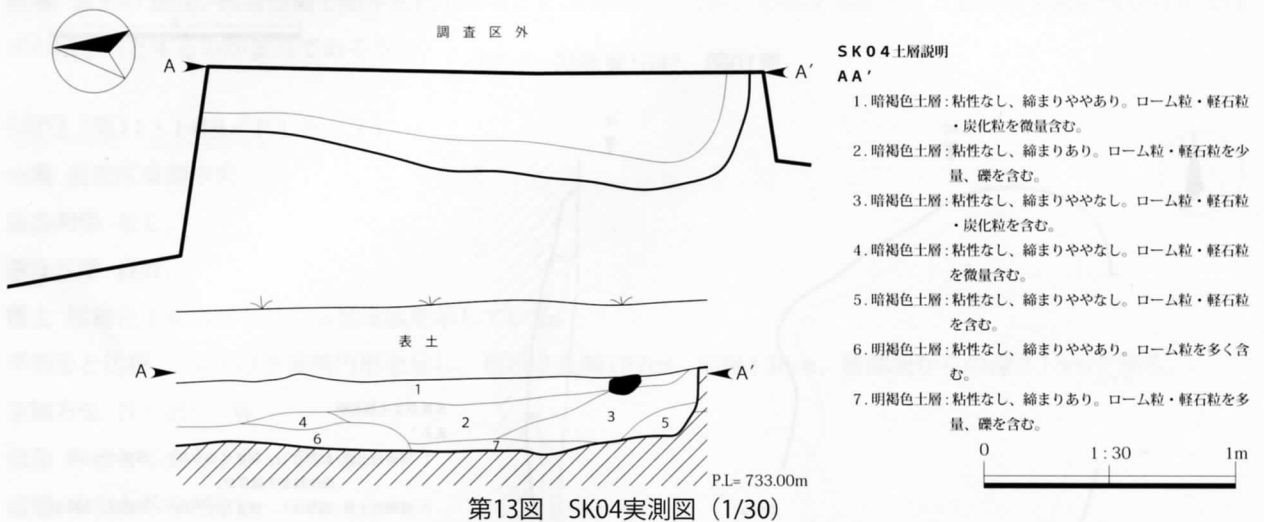
**主軸方位** N-2°-E

**壁面** 下位は外傾し、上位は直立して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

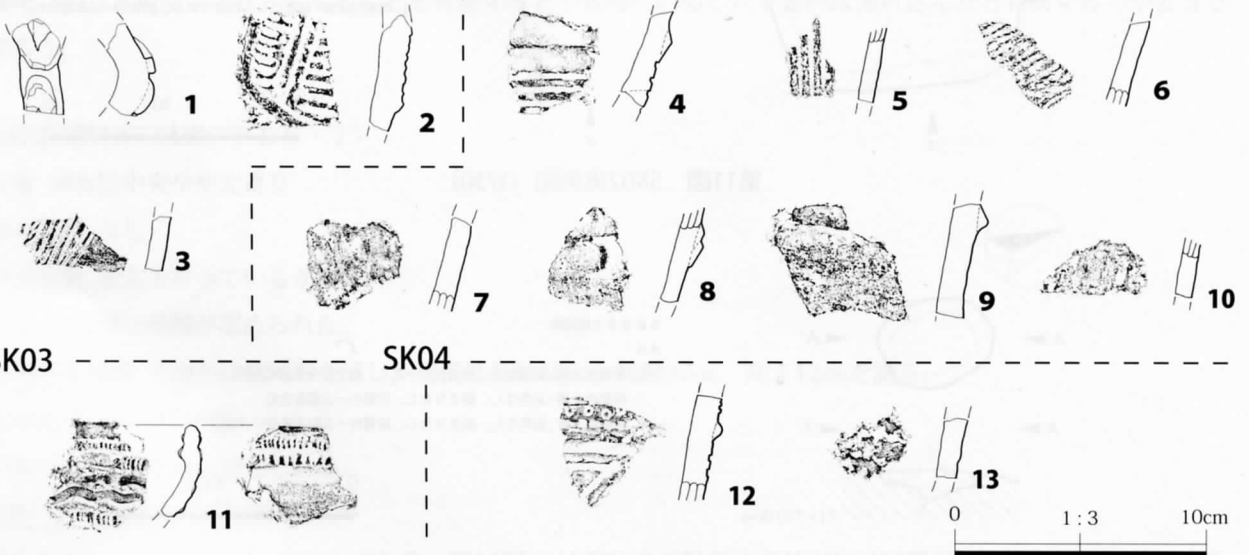
**遺物** 土師器片2点・縄文土器片2点が出土しているが、流れ込みと判断される縄文土器片2点を図示し得た。

**備考** 本遺構もSK01・02と同様に、平安時代の陥し穴とするのが妥当であろう。



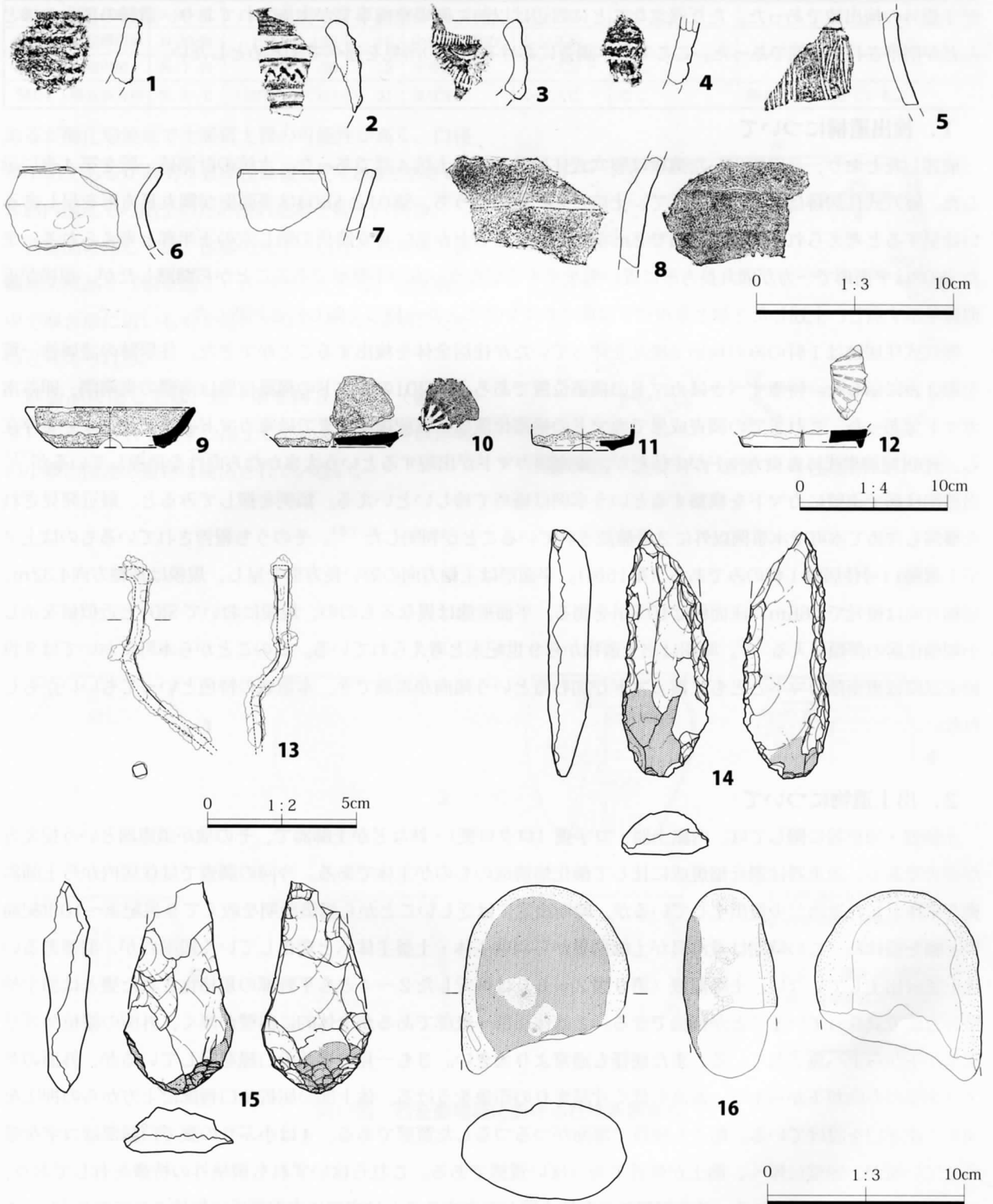
**SK01**

**SK02**



### 第3節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土及び遺構内の流れ込み遺物、トレンチ出土遺物を一括して取り扱う。遺物は縄文時代前期末・中期中葉・弥生時代中期・平安時代・中近世とバラエティーに富んでおり、本遺跡が複合遺跡であることを示している。



第15図 遺構外出土遺物実測図

## 第4章 調査の成果と課題

### はじめに

今回の調査は熊川第一発電所引込変更工事に先立つもので、僅か67㎡の調査であったが、平安時代住居跡1軒と土坑4基が検出された。調査前から周辺の畑で遺物が表採できることから遺構の検出される可能性は高かったが予想外の検出数であった。ただ残念なことに周辺は以前に圃場整備事業が実施されており、遺構の覆土のほどんどが削平された状態であった。ここでは本調査における若干の所見を述べてまとめたい。

### 1. 検出遺構について

前述したとおり、今回検出した遺構は竪穴式住居跡1軒・土坑4基であった。土坑の計測値一覧を第4表に示した。竪穴式住居跡は後述するとして、土坑としたもののうち、SK01とSK04は平面形が隅丸長方形を呈しあるいは呈すると考えられ、規模も長軸で2m前後を有することから、平安時代の陥し穴の下半部と考えられる。またSK02は平面形で一方が隅丸長方形に近い形を呈するがもう一方が不整形であることから躊躇したが、規模が近似値を示す点と、上述した2基と重複せずに配されていることから同じく陥し穴と判断した。

竪穴式住居跡は1軒のみの検出で攪乱を伴っていたが住居全体を検出することができた。住居跡の諸属性一覧を第3表に示した。特筆すべきはカマドの構築位置であろう。SI01のカマドの構築位置は南壁の東南隅、即ち南カマドであった。これまでの調査成果でカマドの構築位置は9世紀後半代までは東カマド主体で北カマドも存在し、10世紀前半代にも東カマドが主体だが、東南隅カマドが出現するという大まかな方向性を把握しているが<sup>(1)</sup>当該期住居で南壁にカマドを構築するという事例は極めて珍しいといえる。類例を探してみると、最近発見された事例も含めて本町で本事例以外に3軒確認されていることが判明した<sup>(2)</sup>。そのうち報告されているものは上ノ平I遺跡11号住居跡1軒のみである(第16図)。平面形は主軸方向の短い長方形を呈し、規模は長軸方向4.32m、短軸方向は復元で2.66m、床面積は10.3㎡を測る。平面形態は異なるものの、規模においてSI01と近似値を示し小規模住居の部類に入る<sup>(3)</sup>。時期は出土遺物から9世紀末と考えられている。このことから本町においては9世紀末以降は東南隅カマドとともに南カマドが加わるという傾向が指摘でき、本地域の特色といってもいいかもしれない。

### 2. 出土遺物について

土師器・須恵器に関しては、内黒土器・コ字甕(ロクロ甕)・鉢などが土師器で、その他が須恵器という捉え方が妥当である。須恵器は還元焰焼成に比して酸化焰焼成のものが主体である。今回の調査では住居内から土師器甕を主体とした遺物が少量出土しているが、時期決定には乏しいことから構築時期を敢えて9世紀末～10世紀前半と幅を設けた。この時期は煮沸具が土師器甕から羽釜主体・土釜主体へと変化していく段階だが、羽釜あるいは土釜は出土していない。土師器甕(第9図2～6)は復元した2～4とも平野部の規格化された甕とは胎土や整形方法で異なっていることが指摘できる。2は体下部～底部であるが全体的に器壁が厚く、外面の縦位ケズリ調整が下から上へ施されている。また底径も通常より大きい。3も一見コ字状の口縁を呈しているが、外面のケズリ調整の方向が下から上で、器高も低く寸詰まりの印象をうける。体上部の屈折や口唇部に上方からの押圧を加えて注ぎ口を設けている。胎土も硬質で器面がつるつるした質感である。4は小ぶりの甕で口縁部はコ字を意識しているが、器壁は厚く、胎土が軟質で粉っぽい質感である。これらはいずれも規格外の特徴を有しており、在地化したものと考えられる。この規格外の在地土器が存在することはすでに中沢悟氏に指摘されており<sup>(4)</sup>、本遺跡出土土器もこの部類に入るものであろう(第17図)。供膳具である須恵器杯(第9図1)は1点だけの掲載で



第3表 山岸II遺跡住居跡諸属性一覧

< >推定値 ( ) 残存値

遺構名	長軸方向	規模 (m)				支柱配置	カマド		周溝	付帯施設	遺物					時期
		長軸	短軸	壁高	面積 (㎡)		位置	構築方法			灰釉	墨書	羽釜	鉄製品	鉄滓	
SI01	N-15-W	3.34	3.30	(0.08)	10.4	2本?	南	石・粘土	△	貯蔵穴	×	×	×	○	○	9世紀末～10世紀前半

第4表 山岸II遺跡土坑計測値一覧

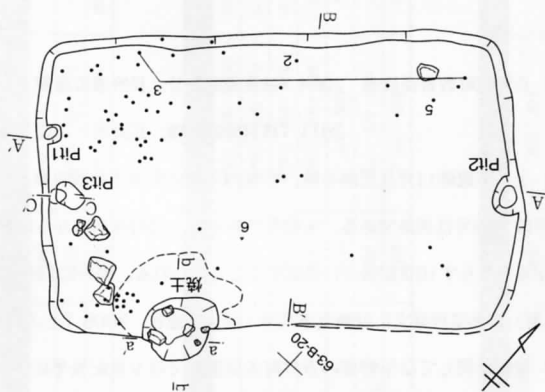
< >推定値 ( ) 残存値

遺構名	平面形	主軸方向	規模 (cm)			底面形態	覆土	重複関係	備考
			長軸	短軸	深さ				
SK01	隅丸長方形	N-86-E	193	133	28	凸凹している	レンズ状	なし	
SK02	不整楕円形	N-20-W	197	136	18	中央やや凹む	レンズ状	なし	
SK03	楕円形	N-7-W	46	36	12	中央凹む	レンズ状?	なし	
SK04	隅丸長方形	N-2-E	(207)	(52)	31	ほぼ平坦	レンズ状	なし	調査区外に延びている。

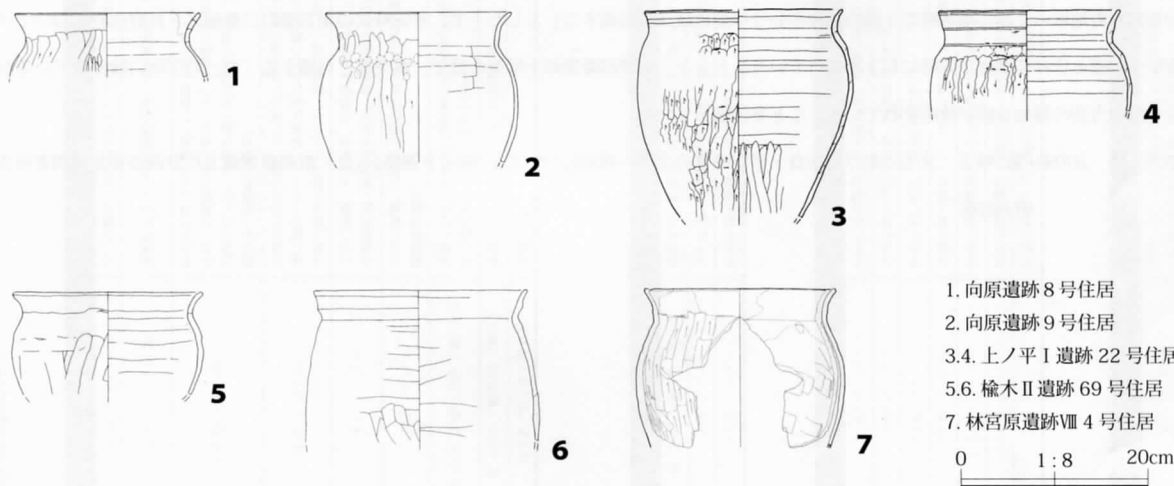
あるが酸化焰焼成で土師質土器の可能性が高く、口径が不明であるが糸切り底部径は復元で4.8cmと小さい。住居内攪乱での出土のため流れ込みと捉えられる。

石製品に関しては、住居の床下土坑から紡錘車の紡輪部未成品? (第9図7) が出土している。自然礫の中で厚台形に近いものを選んで穿孔途中で破損したものと考えられる。

鉄製品に関しては、釘 (第9図8) と楔 (第9図9) がそれぞれ1点ずつ出土している。羽口や鉄滓等の小鍛冶関連の遺物は検出されていない。



第16図 上ノ平I遺跡11号住居跡 (1/120)



- 1. 向原遺跡8号住居
- 2. 向原遺跡9号住居
- 3.4. 上ノ平I遺跡22号住居
- 5.6. 榎木II遺跡69号住居
- 7. 林宮原遺跡VIII4号住居

第17図 西吾妻地域における在り系甕集成

### 3. まとめ

今回の調査では南カマドをもつ住居が検出され、町内でも複数検出されていることが判明した。このことは他地域ではほとんど認められていないことから東南隅カマドとともに本町の当該時期住居の特徴の一つと位置づけることができるであろう。また出土遺物でも、平野部で出土する規格化された「コ字状口縁甕」を模倣した在地系土器の存在を改めて確認することができた。調査面積や期間は僅かであったが本調査の大きな成果といえるだろう。また課題としてこれまで本町の当該期住居は調査事例は増えてきているものの、全町を対象とした諸属性や出土遺物を検討するに至っていないのが現状である。現在進行中の大規模調査の本報告時に本町全体の当該期土器群の時間軸を確立し、遺構諸属性の変遷過程を解き明かす必要があると考えている。

### 註

- (1) 長野原町教育委員会 2004『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集  
2011『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
- (2) 上ノ平遺跡11号住居跡の他、平成24年度に町営土地改良事業に伴う発掘調査で同一遺跡で近接して2軒検出されている。上原1遺跡14号住居跡・15号住居跡である。未報告であるが、15号住居跡からは月夜野型羽釜が出土していることから10世紀前半、14号住居跡は甕のみで杯類が見当たらず10世紀後半に帰属すると考えられる。因みに14号住居跡は東南隅にカマドをもつ13号住居跡に切られている。
- (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008『上ノ平1遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
- (3) 規模に関しては平野部の吉井町矢田遺跡では9世紀後半に中規模住居(床面積16~25㎡未満)が急激に減少し、小規模住居(床面積16㎡未満)が10世紀前半には全体の95%を占めるようになるのに対して、本町では9世紀代は大規模住居(床面積25~36㎡未満)・中規模住居が大部分を占め優勢で、10世紀代に入って小規模住居が増加する傾向にあるようである。また特大規模住居(床面積36㎡以上)は8世紀前半に10%以下となりそれ以降はほとんどつくりだれなくなっていくようであるが、本町では9世紀後半代までは確実につくりだれられており、平野部との差異が看取される。
- 中沢 悟・小林昌二 1997「第7章 調査成果の整理とまとめ」『矢田遺跡Ⅶ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第220集
- (4) 中沢氏は北毛地域の奈良・平安時代の土器様相を検討する中で、「県央や吉井町を中心とした、奈良・平安時代の土器の要素とこの東吾妻町や長野原町地域の土器の基本的な土器の組み合わせや変化はほぼ共通する」とした上で、平安時代の東吾妻町三島地区と長野原町において「月夜野型羽釜と吉井型羽釜が同時にしようされていること」と「ほぼ同時期の土師器の甕で、県央部と共通する「コ」の字状口縁と似ているが胎土や整形方法の異なる甕が使用されている」ことを指摘している。
- 中沢 悟 2009「第5章2 北毛における奈良・平安時代の土器の様相について」『細谷B遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第469集

第5表 山岸II遺跡出土遺物観察表

SI01出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
9-1	須臾器・坏	(1.95) / - / <4.8>	ロク口整形。内外面ともにロク口ナナ。底部は回転糸切り。土師質土部の可能性が高い。	酸化焰・良好	角閃石・長石・小石	淡黄・にぶい黄・にぶい黄	20%残存。外面に手持ちの痕跡あり。
9-2	土師器・甕	(11.6) / - / <4.8>	在地化したゴ字状口縁の体下部・底部か。内外面ともに横位へラケズリ調整。	酸化焰・良好	角閃石・長石・赤色粒	淡黄・にぶい黄・にぶい黄	体下部～底部20%残存。外面全体に付着物あり。
9-3	土師器・甕	(19.3) / <25.0> / -	在地化したゴ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は内傾して立ち上がる。肩部の盛りは強く屈曲気味に膨らむ。口縁部外面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。口唇部には上方からの圧痕により注ぎ口を設けている。体部外面上位は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。内面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。	酸化焰・良好	角閃石・長石・赤色粒	明灰黄・にぶい黄・黒・にぶい黄	口縁部～体部20%残存。
9-4	土師器・甕	(8.4) / <16.6> / -	在地化した小型甕。丸く膨らんだ体部からやや外傾気味に立ち上がり、若干内湾しなから開く。口縁部内外面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。体部外面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。内面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。	酸化焰・良好	角閃石・長石・白色粒・小石	にぶい黄・暗黒・にぶい黄	口縁部～体部上半20%残存。内面・カマド・貯蔵穴底部に煤付着。
9-5	土師器・甕	(4.7) / - / -	ゴ字口縁。やや厚手。口縁部上位は外反し、下位は内傾して立ち上がる。口縁部外面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。体部外面内面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。	酸化焰・良好	角閃石・赤色粒	橙/明赤黒	破片資料(口縁部～体部)
9-6	土師器・甕	(3.6) / - / -	ゴ字口縁。口縁部上位は外反し、下位は内傾して立ち上がる。口縁部外面は横位へラケズリ調整で指面圧痕・輪痕を残す。	酸化焰・良好	角閃石・長石	橙	破片資料(口縁部)
9-7	石製品・紡錘車か	長(4.8) / 幅(2.8) / 厚(2.5)	重量 18.6g。未成品。厚台形に近い自然石を紡錘部にしようとして穿孔途中に破損したものか。穿孔は残存部で最大直径1.0mm、深さ0.6cm。	-	粗粒輝石安山岩	-	30%残存。
9-8	鉄製品・釘	長(4.0) / 幅(0.35) / 厚(0.3)	重量 2.5g。面部幅0.9mm。先端部欠損。	-	-	-	覆土
9-9	鉄製品・楔	長2.3 / 幅1.9 / 厚0.5	重量 3.7g。	-	-	-	床直

SK01 出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
14-1	縄文土器・深鉢	長(3.6) / 幅(2.0) / 厚(1.5)	橋状把手。丸鉢の把手に粘土を貼り付けてモチーフを作り出している。内面は横位ナナ。	良好	角閃石・長石・雲母	にぶい黄・黒/黒	破片資料(橋状把手)
14-2	縄文土器・深鉢	(4.6) / - / -	ハネル文。隆帯区画内に横位・縦位の平行沈線文を充填。区画外はLR横文。内面は横位ナナ。	良好	角閃石・長石・石英	明赤黒/赤黒	破片資料(体部)
14-3	縄文土器・深鉢	(2.2) / - / -	外面は斜位条線。内面は斜位ナナ。	良好	角閃石・長石・雲母	黒黒/オリーブ黒	破片資料(体部)

SK02 出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
14-4	縄文土器・深鉢	(3.8) / - / -	外面は横位隆帯。平行沈線文。内面は横位ナナ。	良好	角閃石・雲母・黒色粒	赤黒/にぶい黄・黒	破片資料(体部)
14-5	縄文土器・深鉢	(3.0) / - / -	外面は横位平行沈線文。内面は横位ナナ。	良好	角閃石・石英・雲母	にぶい黄・黒/黒	破片資料(体部)
14-6	縄文土器・深鉢	(3.4) / - / -	外面はLR横文。内面は横位ナナ。	良好	角閃石・長石・雲母	にぶい赤黒/黒	破片資料(体部)
14-7	縄文土器・深鉢	(3.7) / - / -	外面は斜～横位ナナ。内面に煤の付着あり。	良好	角閃石・長石・雲母	にぶい黄・にぶい黒	破片資料(体部)
14-8	縄文土器・深鉢	(3.7) / - / -	外面は横位隆帯とそこから波状隆帯を垂下か。横位ナナ。内面は横位ナナ。	良好	長石・雲母	灰黄黒/黒黒	破片資料(体部)
14-9	縄文土器・深鉢	(4.5) / - / -	外面は横位隆帯・横位ナナ。煤付着あり。内面は横位ナナ。	良好	長石・雲母・砂礫	黒	破片資料(体部)
14-10	縄文土器・深鉢	(2.4) / - / -	外面は横位ナナ。内面は横位ナナ調整後に横位ミカキ。	良好	長石・雲母	にぶい黒/黒黒	破片資料(体部)

SK03 出土遺物観察表

挿図NO. 図版NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
14-11	縄文土器・深鉢	(3.6) / - / -	内湾して立ち上がる口縁。外面は結節浮線文面に細身の波状粘土紐の段を貼付したLR横文帯を配している。内面は結節浮線文之段、以下横位ナナ。	良好	長石・雲母	黒	破片資料(口縁部)

SK04 出土遺物観察表

種目NO. 図原NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
14-12	縄文土器・深鉢	(4.2) / - / -	外面は隆部上位部に沿って角片・凹形刺突文、隆部下は平行沈線文。内面は横位ナテ調整後に縦位ミガキ。	良好	角閃石・長石	灰黄褐/明褐	破片資料 (体部)
14-13	縄文土器・深鉢	(2.3) / - / -	外面は半截竹管による縦位刺突列を3段以上施文。内面は横位ナテ。	良好	角閃石・長石・雲母	赤褐/褐灰	破片資料 (体部)

遺構外出土遺物観察表

種目NO. 図原NO.	器種	法量 (器高/口径/底径) (cm)	特 徴 (形態・手法等)	焼成	胎土・材質等	色調 (外面/内面)	備考
15-1	縄文土器・深鉢	(3.3) / - / -	口唇部面取り。外面は粘土層を幅位に5条以上重ねている。内面は斜位ナテ。	良好	粘土・材質等	灰褐/灰赤	破片資料 (口縁部)
15-2	縄文土器・深鉢	(4.7) / - / -	外面は細部の粘土層を幅位・山形状に貼付し、間をへらでナテで立体感を出している。内面は横位ミガキ。	良好	角閃石・小石	黒褐/灰褐	破片資料 (口縁部)
15-3	縄文土器・深鉢	(3.2) / - / -	内面は縦位ナテ。	良好	白色粒	にふい/濁/にふい/赤褐	破片資料 (口縁部)
15-4	縄文土器・深鉢	(3.9) / - / -	楕円区画隆部内に連続凹形文。内面は横位ミガキ。	還元焼・良好	長石・黒色粒	黄灰/黄灰	破片資料 (体部)
15-5	弥生土器・甕小	(4.7) / - / -	外面は幅広横線、地文は縦位条線。内面は横位ナテ調整後に縦位ミガキ。内外面ともに横位ナテ調整で外面に指頭圧痕が残る。	良好	角閃石・砂礫	明赤褐/黒褐	破片資料 (体部)
15-6	土師器・甕	(4.3) / - / -	コ字口縁部。口縁部上位は外反し、下位は内傾しながら立ち上がる。内外面ともに横位ナテ調整で外面に指頭圧痕が残る。	酸化焼・良好	角閃石・長石・赤色粒・白色粒	にふい/濁/橙	破片資料 (口縁部)
15-7	土師・内耳	(3.1) / - / -	口唇部面取り。外面は横・斜位ナテ、内面は横位ナテ。	良好	角閃石・砂粒	にふい/濁/橙	破片資料 (口縁部)
15-8	土師・内耳	(5.5) / - / -	段を有する。口縁部は内湾して立ち上がる。内外面ともに横位ナテ調整。	良好	角閃石・長石・砂粒	黒褐/褐	破片資料 (口縁部)
15-9	陶器・皿	2.7 / <11.4> / <7.2>	志野。外面に施釉。付着物あり。	堅緻	-	灰白	20%残存。
15-10	陶器・皿	(1.0) / - / <7.4>	大深丸皿。外面に施釉。見込み部に菊花文。	堅緻	-	灰黄	底部25%残存。
15-11	磁器・皿	(1.2) / - / <7.8>	肥前系か。内外面施釉。見込み部に菊花文。	堅緻	-	明緑灰	口縁部10%残存。
15-12	陶器・碗	(1.4) / - / <4.0>	唐津。内外面施釉。	堅緻	-	オリーブ灰/灰	破片資料 (口縁部)
15-13	鉄製品・釘	長 (6.5) / 幅0.4 / 厚0.4	重量 8.9g。皿部幅0.6cm。中折れ、先端部欠損。	-	-	-	破片資料 (口縁部)
15-14	打製石斧類・打製石斧	長 (12.5) / 幅 4.4 / 厚 2.2	重量 131g。やや厚手の横長剥片を素材に用いている。丁寧な周縁調整が施され、刺突部の鋭利な下半部を刃部に利用している。使用による磨耗痕が顕著で、打製石斧及びスクレイパー的使用を兼ねていると考えられる。上半部両側縁の両面調整加工は、鋭利な縁辺を緩やかにする調整調整と考えられる。全体的に風化が著しい。	-	黒色頁岩	-	解部一部欠損。
15-15	打製石斧類・打製石斧	長 (10.6) / 幅 5.5 / 厚 2.25	重量 111g。扁平な横長剥片を素材に用いている。表面中央に稜を有し、左側面中心にやや粗い、整形刺突が施されている。刃部は丁寧な調整剥片が施され、使用による磨耗痕が顕著である。裏面は下半部にやや粗い整形刺突を施し、さらに周縁に丁寧な調整調整が施されている。全体に風化が著しい。	-	黒色頁岩	-	解部一部欠損。
15-16	礫石器・磨石+砥石+凹石	長 (9.6) / 幅 8.4 / 厚 4.8	重量 441g。平坦形。	-	粗粒輝石安山岩	-	70%残存。

# 写真図版





1. 調査区近景（北西から）



2. 調査区全景（北西から）



1. SI01 (南西から)



2. SI01 (北西から)





1. 西側セクション (南東から)



2. 東側セクション (南から)



3. 北側セクション (東から)



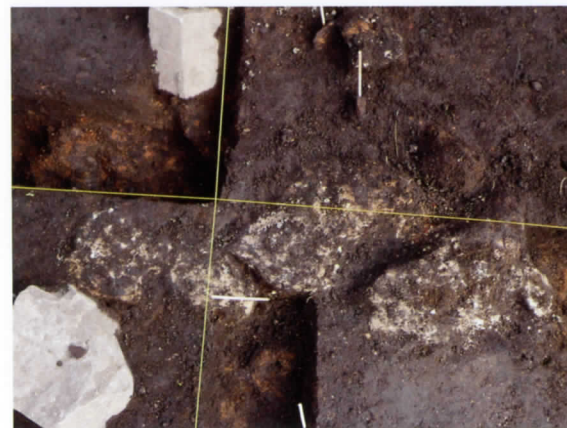
4. カマド完掘状況 (北から)



5. カマド断割状況1 (北から)



6. カマド断割状況2 (北西から)



7. カマド白色粘土検出状況 (北から)



8. カマド火床面検出状況 (北西から)



1. カマド火床面断割状況1 (北西から)



2. カマド火床面断割状況2 (南東から)



3. 貯蔵穴完掘状況 (北西から)



4. 貯蔵穴半截状況 (南東から)



5. 貯蔵穴遺物出土状況 (北西から)



6. P1半截状況 (西から)



7. P2半截状況 (西から)



8. P5半截状況 (東から)



1. 床下土坑 (南東から)



2. 床下土坑半截状況 (南東から)



3. 遺物出土状況〈鉄釘〉(第9図8)



4. 調査風景 (北西から)



5. 土坑群全景 (北から)



1. SK01・02・04 (南から)



2. SK01 (西から)



3. SK01 土層堆積状況 (南から)



4. SK02 (東から)



5. SK02 土層堆積状況 (西から)



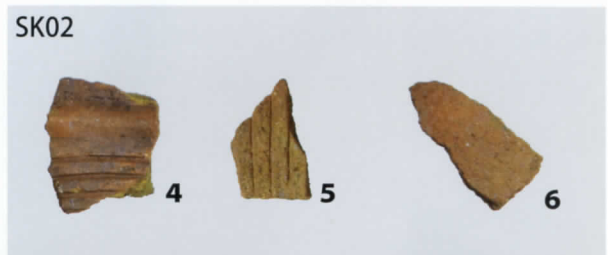
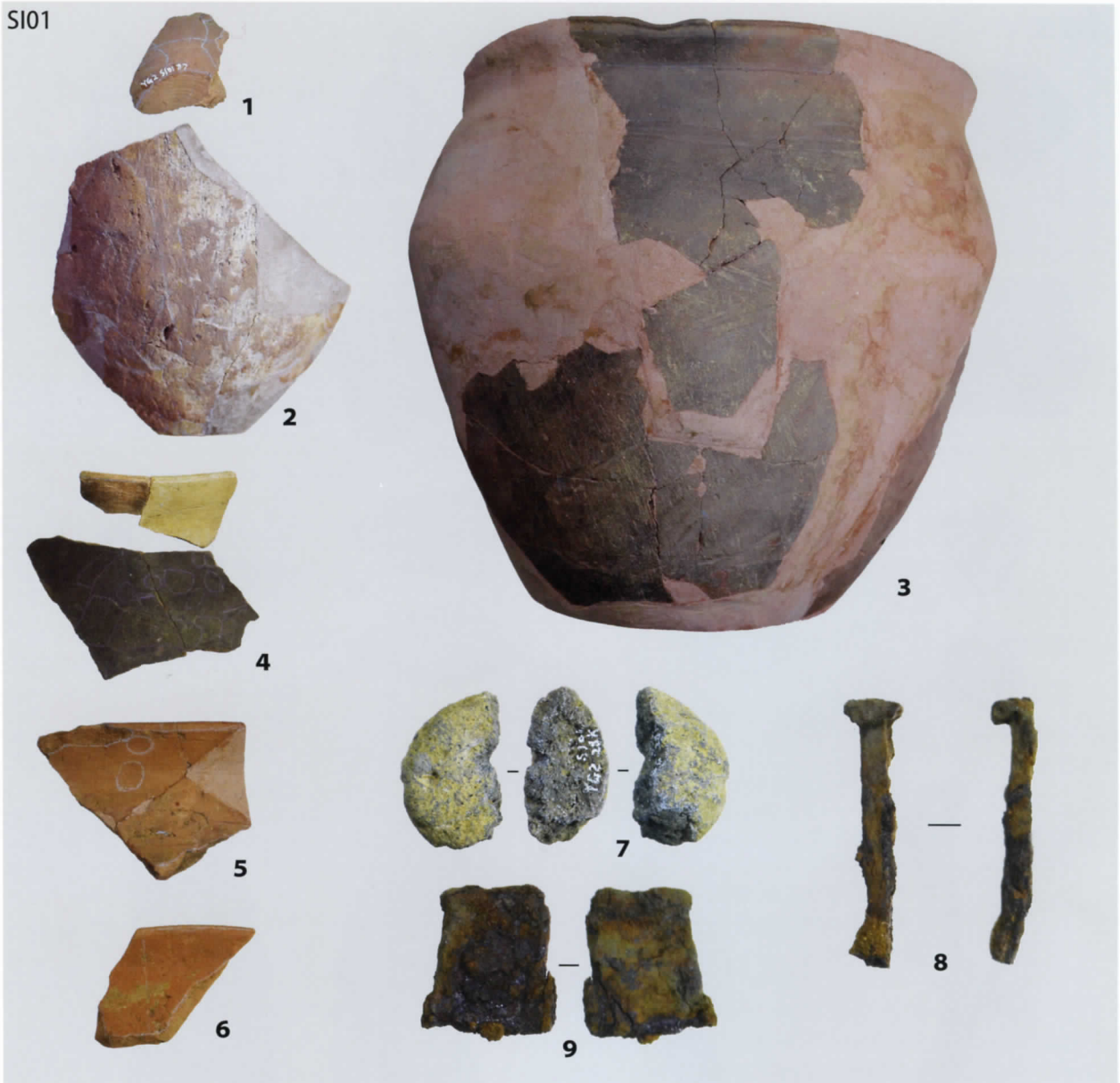
6. SK03 (西から)



7. SK03 半截状況 (西から)



8. SK04 土層堆積状況 (西から)



調査区



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	やまぎしにいせき							
書名	山岸Ⅱ遺跡							
副書名	熊川第一発電所引込変更工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174 Tel.0279-82-4517							
発行年月日	西暦2013年2月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまぎしにいせき 山岸Ⅱ遺跡	群馬県吾妻 郡長野原町 大字与喜屋	10424	134	363134	1383710	20120730 ～ 20120802	67	送電線鉄塔基礎 補強工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
山岸Ⅱ遺跡	集落跡	平安時代		住居跡 土坑	1軒 4基	土師器・須恵器・石 製品・鉄製品・縄文 土器・石器・陶磁器		南カマドをもつ住居 跡の検出
要約	<p>本遺跡は吾妻川の支流である熊川の右岸段丘上に立地する。調査地点の標高は733m位である。縄文時代前期末土坑1基、平安時代の竪穴式住居跡1軒、陥し穴3基が検出された。住居は南壁にカマドを構築しており当該期住居で非常に珍しい事例である。類例は本事例以外に本町で3軒確認され、他地域でほとんど見られないことから本地域の特色の一つとして捉えられた。出土遺物に関しては、基本的な土器の組み合わせや変化は平野部と共通するが、胎土や整形方法の異なる、平野部で規格化された「コ字状口縁甕」を模倣した在地系土器の存在を改めて確認することができた。</p>							

## 山岸Ⅱ遺跡

——熊川第一発電所引込変更工事に伴う発掘調査報告書——

平成25年2月12日 印刷

平成25年2月15日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社





